

一六九 太政官金札融通ノ件

前半欠ク

(前欠)

取引被 仰渡置候得共、御評議之趣有之、以来は直成之昇降、世上之相場ニ被為任候旨 御達相成申度事、

但當分通不可行數通之空令ヲ以現金同様致取引候様

如何程御達シ相成候而も、却而下之人氣を損シ、

益札威相衰候迄ニ而、寸益無之而已ならず、無辜

之罪人を生シ、且現金を以入付置候者、此節請取

候日ニ当リ、札ニ而候ハ、壹万兩ニ付三千兩内

外之損失ニ及、看々迷惑いたし、且外国人下料ニ

金札ヲ買入、御定メノ相場ヲ以開港場運上銀ニ差

出候ハ、年分巨万之御国損ニ可罷成、其外弊害

不可枚挙儀ニ候間、是非本文通相成度、左候ハ、

是迄之銀相場之振合ニ相成、金銀錢之釣合自然と

相立、融通宜ク罷成、外国人取引も相調、外国人

より相納候運上銀茂相場を以致上納候ハ、御損

失無之、其内後条之現金を以引揚之道相立候ハ、

不遠して現金同様相成は案中ニ奉存候、

一府藩県江茂前文同様相場を以無滞可致取引、其支配よ

り丁寧申諭、一同開ケ立候様御仕掛之事、

一御軍艦御備付之為金銀地金御取入御鑄造之上、別段被

差分置事候間、右約束之地金一二倍相増し御注文御軍

艦代御払済相成候共、引続キ御製造、右利潤金被差分

正成富商兩三軒江被仰付、相場ヲ以内々より時々金札

引揚之道相立候ハ、札威忽チ相立可申事、

一銀相場は今成被差留置可然奉存候事、

文書原寸 縦一九・二種 横八二種

一六九 国是確立ニ付建言 氏名不明

(端裏書)
一己巳年何人ノ献言ヲシラスト雖至当ノ論ナル欵」

今般東京

御親臨、群牧ヲ被為

召、輿論公議ヲ以テ国是ヲ可被為定

叡旨ニ付、予メ議参意見可言上旨

御命ニ付、臣等不願魯鈍奉对答候、

一 皇国大基礎之事伏惟ルニ

天祖神器ヲ

皇孫ニ伝へ、斯国ニ

君臨セシメ給ヒシヨリ

皇統綿々億兆仰之如日月、幾万世ノ久シキ以テ今日ニ至ル、彼材能アル者ハ匹夫ト雖モ

天子トナリ、堯ト云舜ト云、或ハ放伐相代リ聖賢ト称スル如キモノニ非ス、是国体ノ最尊モノニシテ宇内ニ冠絶スル所以ナリ、方今宇内交際日ニ開ケ、文物制度各其盛大ヲ競コト、抑物ヲ開キ務ヲ成ス、天下ヲ經綸スル所以、我

皇国固有ノ制度悉ク長処アルニ非レハ、人ノ長ヲ取我短ヲ補フ、固ヨリナリ、然レトモ臣等深恐ル、今日交際ノ盛ナル、心酔耳食ノ徒特ニ彼ノ盛強驕侈ノ風ニ眩シ、文物制度悉彼ノ体裁ニ法ランコトヲ欲シ、彼我長短ヲ分弁スルヲ知ラス、如此ニテハ国体遂ニ併セテ失

ハントス、然則今日

皇紀維新ノ際ニ遭遇シ、人々国体ノ在ル所ヲ明ニシ、彼ノ長スル所ヲ取、我短ナル所ヲ補ヒ、

皇国ノ大基礎ヲ建シテ希フ、

一人材擢用ノ事、

臣等考ルニ、刑賞与奪ハ大権ナリ、大権ヲ持スルハ人ニアリ、然トモ人材必ス大功ヲ成シ、又必ス大害ヲ成ス、治乱ノ由テ判ル、所ナリ、故ニ其人撰ハサル可ラス、其任亦審ニセサル可ラス、佞令智慧人ニ異ナルモ操行不正ハ固ヨリ論ナシ、宜シク才行純正ヲ撰ヒ、総テ温厚誠実ナルヲ挙用センコトヲ希フ、

一 正大ノ道ヲ以テ天下ヲ治ムル事、

臣等考ルニ、昨春以来兵馬匆卒ノ際、多クハ権道ニ処スルモノ有ニ似タリ、今後願クハ専ラ正大ノ道ヲ以テ天下ニ臨ミ給ハンコトヲ、且是迄詔令屢出テ屢變シ、(夕脱カ)下情相疑ヒ、物議日ニ生ス、宜シク号令一ヒ出テ復ラス、一事一令コレヲ始ニ慎ミ、天下ヲシテ由ル所ヲ知

ラシムヘシ、伝曰、令重則君尊シ、又曰、国之安危在
出令ト、庶幾ハ政令清簡ニシテ衆庶信服センコトヲ、
一軍制ノ事、

兵ハ彼ノ長スル所ナレハ、各国ノ長処ヲ取り、以テ我
兵制ヲ一定スヘシ、

但日本環海ノ国故ニ七分ノ海軍ヲ置、三分ヲ陸軍ニ
充ヘシ、

内地人心一定、軍制一定ノ上ハ、大ニ
皇威ヲ海外ニ耀シ、支那・朝鮮ノ如キハ属国タラシメ
西洋各国ヲ庄倒シ、遂ニ宇宙間ノ一
天子トナシ奉ランコトヲ冀フノミ、

文書原寸 縦一九・四種 横三〇・五種

一六〇 原診策 筆者不明
封建郡県ヲ論ス

(表紙)
「原診策」

原診策 上

序説

余ハ医ヲ以テ業トスル者ナリ、未タ神術妙法万全ノ功
ヲ得スト雖モ、多年医籍ヲ講習シ病客ヲ治療スルニ、
略得所ナキニシモアラス、ソノ診察薬治ノ法ヲ原ネ、
コレニ依テ癸丑以來 本朝国事ノ動静ヲ觀察スルニ、
初メ墨人彼理浦賀港来ルノトキハ、即外邪人身ノ表ヲ
襲フ□^(虫損)傷寒論ノ所謂大陽病ナリ、其治法ヲ考フルニ、
邪表ニ襲入スルトキハ、桂枝・麻黄ノ薬剂ヲ以テ発散
シテ解スヘシ、表裏ノ間ニ留滯スルトキハ、柴胡・黄
芩ノ薬剂ヲ以テ清疏シテ解スヘシ、裏ニ進入スルトキ
ハ、大黃・芒硝ノ薬剂ヲ以テ盪滌シテ解ヘシ、然ル□^(虫損)
初メ発散ノ治法ヲ誤リ、遂ニ仮条約等ヲ取り結ヒ、ソ
ノ邪表裏ノ間ニ留滯セシムルニ至ル、幕府コレヲ清疏
スルコト能ハスシテ、大政ヲ還シ奉リシハ、拙医手ヲ
措ヒテ佗医ニ譲リタル道理ナリ、然ラハ讓受タル良医、
傷寒論ニ教ヘ置カレタル通り、知テ犯チ何ノ逆ナルヲ、随テ

証ニ治マ之ヲノ例ヲ遵奉シテ、主当適宜ノ方ヲ施サルヘ
キニ、矢張り前医ノ手段ニ因循シテ、発散清疏ノ法ヲ
用ヒズ、邪ヲ助ケ病ヲ益シテ、遂ニ表実裏虚ノ証トナ
リタルヤウナリ、左様ノトキニハ、又傷寒論ニ、先温
其裏乃攻其表ヲ、温、ムルニハ裏ヲ宜シ逆湯ニ、攻表ヲ
宜シ桂枝湯ニト云コトアレハ、今日ノ形勢、外夷猖獗
シテ内患ヲ生シ、本朝闔國ノ疲憊虚脱ト成リ、金札
マテモ施行セラル、ニ至リタレハ、急先ツソノ裏ヲ温
メンタメ、四逆湯ヲ用ヒスンハアルヘカラス、然後桂
枝湯ニテ表ヲ攻ムルノ手段ハ心得居ルヘキナリ、然ル
ニソノ桂枝・四逆ノ方剂ニハ念ナクシテ、國ノ体裁ヲ
易ヘ、朝ノ制度ヲ變シテ、外夷ニハ十分贏利ヲ射取ラ
セ、藩國ニハ殆ント俸禄ノ聚斂ヲナサントセラル、趣
キアレハ、疲憊虚脱ヲ顧ス、藏府ノ形象位置ヲ轉換セ
ント欲シテ、更ニ針灸ヲ施サントスルカ如シ、若人身
ニ取テハ迫モ出来ヌコトニテ、強テコレヲナサハ、死
スルヨリ外ハナク、素人ノ聞テモ惕然トシテ危ク思フ

ナルヘシ、故ニ先ツ攝生保養ノ道ヲ尽シ、人參・付子
ノ藥ヲ用ヒ、元氣ヲ復セシメ、氣血充実ニ至ラハ、桂
枝・麻黄ノ發散力、柴胡・黄芩ノ清疏ヲ用ヒテ、邪風
ヲモ除キ、終ニ全快ノ功ヲ奏スヘシ、是初ニ云カ如ク、
診法ヲ推シテ以テ國事ヲ論スル所以ナリ、古ニ云ク、
論シテ病ヲ以テ及國、原チヲ診テ以テ知ル政ヲトアレハ、乃
チ此原診策ヲ著シテ、当路在位ノ人觀覽ニ供シテ、撰
養ノ道・參付ノ剂ヲ施シ、國家ノ病ヲ療セシメ度ク思
フノミ、人ソレ不レハ在ラ其位ニ、不謀ラ其政ヲノ聖語ヲ
以テ、深ク毀責スルコトナカルヘシ、

復古第一

昨春來、王政復古ト拜承シテ、實ニ難有コトト思ヒ
シニ、其後ハ日新維新ト云コト、已ニ公文ニモ載ラレ
タレトモ、ソノ形跡、事實ニ質スルニ、未タ其効ヲ見
奉ラス、凡百ノ事一モ古ニ復セズ、只制度文物古旧ノ
コトハ強テ轉換シテ、コレヲ日新維新トセラレシヤウ

ナリ、於是テ、恐ナカラモ 皇威朝権ニ畏服シテ、天下ノ人 勅詔ヲ違背シ奉ルモノハナケレトモ、懷徳感恩シテ、庶民マテモ信服スルノ景象見ヘカタシ、是下位ニ居ル者ニアラサレハ知レカタキノ病ニテ、日新維新ノ誤治ヨリ起テ、復古ト云全快ノ場ニ至ラサルヘシ、凡下位ニ居ル者ハ、雲スカシニ見ルコトナレハ、上方ノ物ハ暗夜ニテモ分リ易シ、ソノ上、平交ニハ互ニ忌憚隠諱ノコトナケレハ、情実ヲ得ルコト多キナリ、又上位ニ在マス人ハ、不知廬山ノ真面目ヲト云フ氣色アリ、ソノ上雲煙遮リ易ケレハ、下界ノコトハ知レ難シ、願クハ未^レ明^ケ先^ツ見^ル海底ノ月ヲト云フ実験アリ度ク思フナリ、夫日新維新ト云ハ、本大学ニ出タル文字トハ、誰ニテモ知タルコトニテ、日新ハ湯ノ盤ノ銘ナリ、盤ハタラキノコトニテ、人ノ沐浴カ衣ノ洗濯ヲシテ旧垢ヲ除キ去リテ、日々ニ新シキヤウニスルコトナリ、ヨゴレタル肢体ヲ捨テ、別人ニ取替ヘ、垢付タル着物ヲステ、他衣ニ着替ヘルコトニテハナカルヘシ、去リ

ナカラ賢人ト新衣ニ取替ヘ着替ヘカ出来ルコトナレハ、此上モナキ結構ナルコトナレトモ、沐浴洗濯ヲ知ヌトキハ、ソノ取替タル人モヨゴレアリ、着替タル衣モ垢付キテアリタラハ、何ノ詮モナキコトナリ、ソレ故ニ詩ヲ引テ、周ハ雖旧邦ナリト、其命維^レ新ナリトアリテ、文王ノ王者ニナリ玉ヒタル、唯ソノ天命ノ新ナルコトニテ、旧邦ノ善政・賢者ハ矢張易ハルコトナカルヘシ、コレヲ取棄テタラハ、維新ノ誉ハナカルヘシ、語ニ云、温^テ故^ヲ而知^ル新^ヲト聞^トキハ、聖人ノ新ニ説玉フコト、一モ故旧ヲ離レテ別物ニ轉換スルノ意ハナキコトナラスヤ、又詩ニ、率^リ由^ル旧^章ニト云ヒ、語ニ、故^旧不^レ遺^ス、則^チ民^不偷^ウス^ラト云コトアレハ、旧ニハ由ルヘクシテ離ルヘカラス、又詩ニ、古訓是^レ式^トル^ト云ヒ、語ニ、述^而不^レ作、信^而好^古ト云トキハ、古ハ復スヘクシテ棄ヘカラス、サレハメツタニ新作意ニ出ルコトハ戒ムヘシ、然ルニ今ノ一新ハ、制度文物ノ轉換ヲ事トシテ、多クハ新作意ニ出ルヤウナレハ、願クハ前ニ舉ル所ノ

聖語ヲ良薬トシテ、旧ヲ離レサルノ一新ニテ、国病ノ快復ヲ致スヤウニアリ度キナリ、又、今日シキリニ變革ト云コトヲ聞ケリ、變革トハ一新ノ所作ニテ、亦タ別物ニ轉換スルノコトニアラス、變化ト云モ、一事一物ニ就テアルコトニテ、變ハ化ノ漸、化ハ變ノ成トモ見ヘタリ、又、權變通變トハ、皆廻リ周リテソノ正經ニ合フコトナリ、革ハ本一ツノ獸皮ニシテ、毛ヲ去リテ所用ノ改リタルナレハ、又、轉換ノコトニアラス、易伝ニモ、天地革而四時成ル、湯武革メテ命ヲ順テ乎天、而応ス乎人ニ、革之時大矣哉ト見ヘタリ、春ノ氣ノ夏ニ移ルモ、夏ノ氣ノ秋冬ニ移ルモ、夏ノ世ノ殷ニ移リ、殷ノ世ノ周ニ移ルモ同シ道理ナルヘシ、四時ハ生氣ノ流行ナリ、三代ハ仁政ノ流行ナリ、然ルニ四時ニハ水旱飢荒ニテ、生氣ヲ轉換スレハ災害ト作り、三代ハ桀紂幽靈・奏始皇ノ暴虐ニテ、仁政ヲ轉換シテ亡国ニナリタルナリ、轉換ノ弊亦タ大哉、去レトモ、三代革命ノトキ、必ス制度文物ヲ更メテ、周ノ正朔抔ハ、冬三

月ヲ春ト作シ、春秋ニモ態々王正月ト書カレタルハ、民間常用ノ正月ニ別カタレシト云説モアル程ニテ、孔子モ、行夏之時ヲト云レタレハ、宜ヲ得タルトモ覺ヘサレトモ、民ノ耳目ヲ新ニシ、ソノ政ニ由ラシムル為メニハ、カヤウニ變更アルヘキコト(虫損)見ルカ(虫損)ハ、本邦ノ今日モ革命ノ見ヲ變更ヲ事トセラル、ヤウナリ、サレハ当然ノコトトモ思ハルレトモ、本邦ノ今日ハ革命トハ云ヘカラス、即

王政復古ナリ、昔シ一旦政權ヲ鎌倉ニ与ヘテ、幕府ヲ開カシメシ以来、足利ニ移リ豊臣ニ移ルノ際ハ、幕府ノ革命トモ云ヘキナリ、今ソノ政權大政官ニ返リタルマテニテ、皇家ニ於テハ千古不易、赫々トシテ照臨光被シ玉ヒシコト、何ノ革命モアラセラレス、只時々昏明陰晴ノアルマテナリ、何ソ臣下ノ幕府ト命ヲ争フテ、變更ヲ事トシ、民ノ耳目ヲ新ニシ、政ニ由ラシムルニ及ハンヤ、千古来ノ

王政ニ復セラル、マテニテ、民モ安心シテ信服シ奉ル

ヘシ、是マテモ、幕府即 王政ノ出ル所ト心得テ、コレニ依テ勤

王セント欲スル者^(出撰)アルヘケレトモ、 皇家ヲ背テ、

幕府ニ向フ者ハ一人モアラサルコト、今日ヲ以テ知ヘキナリ、扱變更ノコトニ付、一ノ譬ヲ以云フニ、良工

ノ良材ヲ扱ンテ建タル美宅大廈ニテモ、年久敷経歴スレハ、雨戸障子ノ走リモ悪クナリ、屋根モ損シテ雨ノ

漏ニ難儀シ、床モ落チテ座臥ニ迷惑スル様ニ成ルコトアレハ、鴨居敷居ノ溝ノヤウニアナヲサラヘ、雨戸障

子ノカマチ杯ヲ改メ、屋根ヲ繕ヒ床ヲ揚クレハ、復本ノ美宅大廈タルコトヲ得タリ、 王政古代ハ善美ヲ尽

スト雖モ今日ニ至リ弊害ナキコト能ハス、コ、ニ於テ^(出撰)屋根□繕ヒ床ヲ揚クルヤウニ、ソノ弊害ヲ除キタラハ、

復本ノ 王政ニ替ルコトハナカルヘシ、ソノ弊害ヲ見テ美宅大廈ヲ打潰シ、今ノ拙工ニテ悪材ヲ用ヒ新ニ家

ヲ建直シタラハ、暫時ハ宜シキヤウナレトモ、ヤカテ暴風地震ナトノ為メニ大廃ニ及ブヘシ、国家モ是ト同

シ道理ナル故ニ成丈旧ニ仍リ、古ニ復シテ、ソノ利害ノ生スル所アレハ損益スヘクシテ妄ニ轉換スヘカラス、

語ニ云ク、殷ハ因ル於夏礼ニ所損益スル可知也、周ハ因於殷ノ礼ニ所損益スル可知也、其或ハ繼ク周ヲ者ハ雖

モ百世可知也トアレハ、聖人ノ變革ハ即損益ニテ轉換ニアラサルコト知ルヘキナリ、秦始皇ハ全ク国家ヲ転

換シタレハ、孔子モ知ラレサル所ニテ、若シ之ニ効ハントセハ二世ニテ亡フルノ警戒慎マスンハアルヘカラス、右ハ今日国家行政ノ病因ト察スレハ、カク養生ノ

法ヲ説クモノナリ、

封建第二

封建郡県ノ 勅問アリシ、未宦制ノ様子ヲ以テ見奉レ^(出撰)□、略々郡県ニ定メラレシ趣キナリ、是国家羸憊ノ病

兆ト診察スレハ藥治ナクンハアルヘカラス、夫封建ハ唐虞三代聖人、世ヲ御スレハ必行ハル、ノ公法ニテ

本朝ニテ

神武已後

文武已前ハ、封建ノ名ハナケレトモ、自然ノ体裁、封建ノ趣キナリ、其比、尸ト云モノハ、漢土ノ姓ト爵トヲ兼タルヤウニテ、一タヒ尸ヲ賜ヘハ、子孫・支族ニモ及フト云トキハ、世襲ノモノナリ、ソノ内、王・公・^{オハキキ}首・造・直・^{オフトミヤフコノタヒ}^{アカスシ}村主ナトハ、公・侯・伯・子・男ノ爵ニ能似タリ、ソノ国県ニ土着セシ大族ニ命ヲ賜ヒタルト見ヘテ、封セラル、ニ能似タリ、是ヲ以天下ヲ維持藩屏シ玉ヒテ、日本ノ武威赫々ト顯レタルト覚ユルナリ、

神武ノ橿原ニ都ヲ奠メ玉ヒシトキ、大倭国葛城国ノ造ヲ定メ、ソノ外、功アルモノニ国造ヲ賜ヒ、ソノ次ハ県主ヲ定メ玉ヒ、ソレヨリコノカタ代々ニ任セラレテ、和銅ノ比マテ総任ノ国造百四十四アリシト聞リ、又、日本紀成務四年ノ詔ニ、自今以後、国郡ニ立コト長ヲ、^ニ置キ首ヲ、即取テ当国之幹了ナル者ヲ、任ス其国郡之首長ニ、是ヲ為中区之蕃屏ト也、又五年ニ令諸国ニ以国

郡立造長ヲ、^ニ置キ^ニ稱置ヲ、並ニ賜フ楯矛ヲ、以テ為表ト見ヘテ、ソノ代々任セラレテ中区ノ蕃屏ト云トキハ、前ニ云ヘル愚考ノ如ク、全ク封建ノ体ナラスヤ、西洋モ垂墨利加ハ封建ノ体ニテ、天子ノ場ニハ大棟梁ヲ交々立ルハカリノ違アルナリ、是ハ新聞ノ国故出来ルコトニテ、旧来天子ノ立タル国ハ、英吉利ニテモ行ハレサル所ナリ、サレハ封建ハ聖人ノ公法ニテ、六韜ニ、天下者非ス一人之天下ニ、天下者天下之天下也ト云コトアリテ、即封建ノ主意ヲ述ヘタルモノナリ、天下ニ王タルノ人ハ、ソノ土地人民ヲ分割シ、各有功有徳ノ人ニ与ヘ、相共ニ天下ヲ守テ、自ソノ大綱ヲ執リ、大事ヲ決シテ天子ノ職ヲ竭サレタリ、然ルニ秦始皇ニ至リテハ、六王畢而四海一也ト云、時節ヲ得テ天下ヲ一人ノ私有トナシ、遂ニ郡県ノ法ニ轉換シタリ、戦国^(世)周室ノ自滅ヲ見テ、封建ノ弊ト思フハ、始皇ノ臆見ナルヘシ、周室ノ自滅ハソノ徳ヲ失フニアリテ、法ニ因ルコトニハアラサルヘシ、徳ナキトキハ法ヲ改メ

テモ秦ハ二世ニテ亡ヒタリ、故ニ郡県ハ覇者ノ私法ニシテ、憑ムヘカラサルコトナラスヤ、聖人ノ公法ハ疆國ノ手段コレニ過キスシテ、三代ニ外患ハ少キコトナリ、三代ノ夷狄ト云ハ、版圖ニ帰セサル荒服ノ人民ニテ、戦國ニ至リテハ所見ナキコトナレハ、本朝古ノ蝦夷ノ類ナルヘシ、今日ノ外患トハ事ノサマ異リタリ、扱漠高祖^(虫損)□在リ^(虫損)天下ヲ取りタル功臣少カラサレハ、一人ニテ天下ヲ私有スルニ忍ヒス、封建ヲ取雜ヘ置キテ、終ニハソノ功臣ノ国モ絶滅シテ、郡県ノミ多ク成リタリ、是ニ於テ直ニ匈奴ノ外患モ生セシヤウニ覺ルナリ、ソレヨリ代々外患止マス、唐ノ突厥・契丹、宋ノ遼・夏・金、元・明ノ韃靼ニ於ケルカ如シ、遂ニ宋・明ハ天下ヲ外夷ニ奪ヒ取ルニ至ル、実ニ可歎ノ甚キナリ、是全ク郡県ノ弊害ニ非ルコトヲ得ンヤ、唐ノ藩鎮盛ニ成テ、尾大不^ル掉^ハ愛アルハ、天子ヨリ權ヲ殺キ、勢ヲ奪ハント相争ノ私心アルヲ以テナリ、皆封シテ諸侯トナシ、コレヲ統轄シタラハ、ソノ事ハ平ニ

出テ、却テ便利ヲ得ヘキナリ、唐ニモ此議ヲ建シ人アルヤウニ覺レトモ、遂ニ用ヒ^(虫損)□、唐ハコレニ弱マサレタリ、宋ソノ弊ニ懲テ節度使ヲ置レサルハ宜ルヘケレトモ、兵力甚弱クシテ、遂ニ蒙古ノ手ニ亡ヒタリ、近世清朝ノ阿片煙ノ変乱モ、封建ニテアリタラハ、カヤウニ敗績ニハ至ラサルヘク思フナリ、本朝ニテモ、上古封建ノ体ヲ改テ、国司ヲ設ケ、全ク郡県ニシ玉ヒシ後ハ、国守ノ次ニ国造ヲ置ヒテ、旧来ノ權ヲ押ヘラレタルナルヘシ、遂ニイツトナク国造ヲ廢シテ、守・介・掾・目ニテ治メ玉ヒ^(虫損)其コロノ国政、文獻徵スルコトモ少ク、可觀ツモノヲ^(虫損)□カス、程ナク天下ノ大乱トナリ、国郡ノ武家ニ豪族起リテ、鎌倉ニ幕府ヲ開レテ、コレハ直ニ守護・地頭トナシ封建ノ体ニナリタレハ、国司ハ自廢シテ、足利・豊臣ヲ歴テ、遂ニ徳川氏ノ代ニ至リ、全ク封建ノ形勢ヲ具ヘタリ、在昔神功ノ三韓ヲ^(虫損)□シ玉ヒ^(虫損)等ヲ置レタル、封建ノ体ニテアリタルトキノコトナリ、北条ノ蒙古ヲ攘ヒ、豊臣

ノ朝鮮ヲ伐チ、徳川氏ノ鎖国セラレシハ、後ノ封建ノ
体ニナリタルトキノコトナリ、故ニ和漢共、外夷ノ患
ヲ防グニハ、封建ノ制ニ及クハナシ、今日ノ本邦、
目前ノ外患アルニ、郡県ニ徇ハルハ、恐ナカラ廟謨
ノ疾病ト覚ルナリ、第一、六王畢ルト云コトナキニ、
此制ヲ起サハ、国々ノ臣民各ソノ主ニ竭スノ忠情ヲ破
ラレテ、^(虫損)□テ怨恨ヲ生スヘシ、第二ニハ
神武以来古代ノ良法、唐虞三代聖人ノ公法、墨夷華盛頓
ノ善法ヲ顧ミラレスシテ、本邦文弱ノ弊法、秦皇以
来覇者ノ私法ヲ採リ用ヒラルレハ、必疲憊ヲ致スヘシ、
第三ニハ、人ノ武勇ハ節義ニアリ、節義ハ^(虫損)□主ニ報ス
ルノ忠心ヨリ出ツ、故ニ封建ノ制ナラハ、天下ハ天下
ノ君臣、一国ハ一国ノ君臣、一家ハ一家ノ君臣アリ、
一タヒ此義ヲ結ヘハ、各ソノ君ノ為メニ忠ヲ竭シ、死
ヲ致シテ、一人・一家・一国相共ニ天下^(虫損)□維持シテ勤
王スルトキハ、ソノ^(虫損)□剛当ルヘカラサルコト、コレニ
及ク^(虫損)□ルヘシ、若シ郡県ニシテ、此君臣ノ結義ヲ

奪ハ、天下ノ為ニ力ヲ竭スモノハアレトモ、死ヲ致
スモノハ少カルヘシ、去ナカラ天子ノ為ニ忠ヲ尽スコ
ト、即チ君臣ノ大義ニテ、苟モ大義ヲ知ルコトアラハ、
郡県ノ制ニ成タルトテ、怯弱ニ陥ル詛ハアルヘカラス
ト云ハ、一ト通りノ正論ニテ、サモアルヘキコトナレ
トモ、古今ノ世態ヲ通観セス、上下ノ人情ヲ熟知セサ
ルノ説ナレハ、聞ヘクシテ見ヘカラス、言フベクシテ
行ルベカラス、ソノ故イカン^(虫損)□ニ、天子ノ万民ニ
於ケル位ノ尊卑、情ノ親疏、居所ノ遠近ニ随ツテ、各
隆殺ノ異ル所アレハ、恩義ノ厚薄、固ヨリ弁ヲ待タサ
ルナリ、故ニ尊官近親ノ人ハ、死ヲ以テ事ヘ奉ルヘケ
レトモ、卑人疏遠ノ徒ハソノ情実如何アラン、一国ノ
守・介・掾・目ハ官長ニテ君主ニアラス、古今共ニ官
長ノタメニ死ヲ致スモノヲ聞カズ、苟モ君臣ノ義ヲ存
スレハ、一家ハ婢僕タリトモ、節ニ死スルモノ往々ア
ルコトナリ、然ルニ、今若シ諸藩君臣ノ名分ヲ滅シ、
情義ヲ奪ヒ玉ハ、ソノ誠忠節義ノ臣ハ、必ス嘆願テ

申イッベシ、ソノ辞ニハ、率土之浜無非王臣ト云事ハ、固ヨリ封建ノトキノコトニテ誰モ承知ノ前ナリ、サラハ天子ハ万民ノ君タルコト、知者ヲ待タサルコトナカラ、是マテ各ソノ主ニ仕ヘ、^(虫損)□^(虫損)禄官位ヲ受ケ、譜代相恩ノ君臣ト相恃ミ、結ヒ合タル義ヲ何分ニモ一朝ニ解キ棄テ去ルニ忍ス、孰レモ直ノ朝臣ニナラサレハ、天子ニ忠ヲ尽サレスト云道理ハアルヘカラス、各ソノ主ノ為メニ命^(虫損)□^(虫損)致スコト、即勤王ト心得タルニ、只今マテ君ト仰キ、主ト敬マヒタルモノヲ、俄ニ朋輩同士ニ引下ケテ、只ソノ貴族トノミ心得ルコト、数十代ノ恩義ヲ一時ニ忘却スルヤウニ成リ果テ、情ニ於テモ忍ヒサル所ナリ、如此情義共ニ不忍ノ心アレハ、何卒此情義ニ奪剝セラヌヤウ哭泣シテ伏冀シ奉ラハ、如何ノ詔諭アラセラルヘキヤ、去ナカラ近世天下ノ人心、時勢ニ阿ネリ、廢斥ヲ恐テ忠信ヲ主トスルコト薄キヤウナレハ、右等ノ嘆願申シ出ルコトハ無ルヘケレトモ、ソノ無ハ真ノ無ニ非ルニ、ソノ無ヲ好シトシテ、省察ス

ル所ナクンハ、人心ヲシテ驩虞如タラシムルコトサヘモ出来難ク、只抑鬱屈伏セシメテ、遂ニ不測ノ災ヲ醸シナスモ亦未タ知ヘカラス、且又、諸藩ノ版籍モ各ソノ主ヨリ還シ奉レハトテ、ソノ江海・山野・新墾開拓、又ハ物産蕃殖ノ法マテモ、数代自力ヲ竭シテ、悠久富國ノ謀^(虫損)□^(虫損)ナシ置シヲ、何ノ罪モナキニ引揚ケ玉フコト、恐ナカラ

王政ノ慈仁トハ仰キ奉リ難キコトナラスヤ、又ソノ臣民ノ俸禄マテモ、十カ一ノツリ合ニテ減少ニナルヘキ趣ナレハ、嘆息セサルモノハナシ、西洋諸國ノ体裁ヲ私淑セラレンコトニモアルヘケレトモ、四民ノ立タル國ノ士ト云モノハ、兼テ道義ヲ講明シ、武技ヲ習練シテ、治國^(虫損)□^(虫損)濟々、戰國ノ赴々^(虫損)タニモノヲ、俄ニ農工商^(買カ)價ニ帰セシメナハ、ソノ事ニ堪スシテ、多クハ凍飢ニ及フヘシ、故ニ孟子ニモ、勞スル心ヲ者ハ治メ人ヲ、勞スルカヲ者ハ治ラル於人ニ、治ラル於人ヲ者ハ食人ヲ、治ムル人者ハ食ハル於人ニ、天下之通義也ト云ヘリ、ソノ勞心者ハ

士ナリ、勞力者ハ農工商價ナリ、若シコレヲ一ニセハ、
又、所謂、巨屨小屨同レハ賈ヲ、人豈ニ為シ之ヲ哉ト云趣
ニテ、君主ノ心ト臣民ノ情ト、是皆不忍ノコトナラス
ヤ、此情義ノ不忍所ハ、即チ惻隱羞惡ノ心ヨリ拡充シ
来ルモノニテ、又、孟子ノ所謂、(庄損)□不忍人之心ヲ、行
ハ、不_レ忍ヒ人ニ之政ヲ、治天下、可運之ヲ掌上ニト聞ク
トキハ、此情義ノ深キトコロヲ、強テ 天子ノ恩威ヲ
押張り、断然ト解キ放シ玉ハ、不忍ノ政トハ云ヘカ
ラス、又、臣民ノ情義コレニ因テ、次第ニ薄劣ニナリ
行キテ、此已後、万_一逆賊カ外国ノ誘ヒニヨリタラ
ハ、 天子ト万民トノ君臣ノ分モ、今日ト同様ニテ、
タヤスク解キ放タル、コトモヤアラント可懼ノコトト
モナリ、彼是ヲ併セ考レハ、封建ノ制ハ強クシテ郡県
ノ制ハ弱キ道理ナリ、此三件ノ徵証ハ、誰レモ心付ク
コトナレハ、定テ諸家ノ対策、建白ニ尽サレタルコト
ナルヘケレトモ、遂ニ採用ナカリシハ、必ス病固ナル
ヘキナリ、今コレヲ診察スルニ、ソノ一ハ官家はマテ

久敷武家ニタシナメラレシヤウニ思ワレテ、今ヨリハ
尾大不掉ノ弊ヲモ除キ、諸大名・人主ノ權ヲ殺キタキ
無弁ノ鬱憤ヨリ出ルコトモアランカ、又、ソノ一ハ、
小藩・末家兼テ志ヲ屈シタル族モアリテ、此機ニ乘シ、
ソノ志ヲ據フルコトモヤアラントノ私念モアルヘキコ
トナラン、又、ソノ一ハ、天下ノ人才ヲ一処ニ集メン
トノ公議ハ此制ニ限ルトノ偏見ニ出タルナルヘシ、又、
ソノ一ハ、西洋ヲ信セラルルノ余リ、洋人ノ議ヲ採ラ
ル、ナラン、洋人ハ是マテ、 本邦ヲ心ノ假ニ取扱ノ
出来サルハ、封建ノ体アルニ因ルト云コトヲ詳知シテ、
ソノ論說ヲ巧ニ回シ、暗ニ国力ヲ弱メテ、益々自由ヲ
働カントノ策略ヲ甘受セラレシコトニモアランカ、又、
ソノ一ハ、功利競望ノ徒、藩国君臣ノ羈絆ヲ脱シテ、
天下ニ名譽ヲ立ントノ大欲心ヨリ、暗ニ煽動セシコト
ナルヘシ、此五件ハ、皆望診ニ出テ、問聞切ノ三診
ヲ参互セサルコトナレハ、忌憚ナキノ責ヲ受ケ、不都
合ノコトニテ見誤リモアルヘケレトモ、万_一ソノ病因

ニ中リタラハ、速ニ警省セラレテ、愈候ニ赴キ玉フヘシ、

神武已後、上古封建ノ体ナリシコトハ、前ニ挙ゲタル通リニテ、又、ココマテ旧幕ノ制ニシテハ、全ク封建ノ形ニ成リタレトモ、前後共ニ名義正シカラス、是淳朴ノ政ト因循ノ弊ニ依ルコトナリ、故ニ今体裁ハ

神武ノ古ニ復シ、名目ハ旧幕ノ弊ヲ除キ、中古郡県ノ文弱ヲ矯メテ、断然ト諸藩ヲ封シ、是マテノ通りニ、土地人民ヲ賜フヘシ、周ノ五等ノ爵ト、本邦数名ノ戸トノ意ニ従ヒ、ソノ繁ヲ省キ、今日定メラレシ、大中小三藩ノ等ニ応シ、左ノ通りニ爵ヲ賜ハルヘシ、

大藩ヲ藩后トカ国公トカノ爵称ニ改メラルヘシ、后ハ堯典ニ班瑞ヲ群后ニトアリ、又畢命ニ三后協心トアル、誰ニ周公君陳畢公也トアレハ諸侯ノコトヲ后トモ云ヘキ故ニ、今此字ヲ用ラルヘキカ、又公ハ本朝戸ノ一ニテ、キミト唱ヘタレハ、此字ニ復古アルヘキカ自カラ周ノ爵称ニモ合フコトナリ、

中藩ヲ藩主トカ国首トカノ爵称ニ改メラルヘシ、

主ハ一國ノ主人ト云コトニテ、藩カ国ノ字ヲ冠ラスレハ、主上トハ廻ニ別アルヘシ、又首ハ本朝戸ノ一ニテオフト、唱ヘタレハ、此字ニ復古アルヘキカ、

小藩ヲ藩君トカ国造トカノ爵称ニ改メラルヘシ、君ハ明ノ郡君・(侯)郷君ハ宗室ノ女ノコトナレトモ、君ノ字女ニ限ルヘカラス、前ノ后モ同様ナリ、戦國ノ代ニ、平原君・信陵君・孟嘗君ノ如キニ因リテ、此字ヲ用ユヘキカ、又造ハ本朝戸ノ一ニテ、ミヤツコト唱ヘテ国造ノ名アリ、是ハ久敷ク唱ヘ来タルコトナレハ、此字ニ復古アルヘキカ、

右ノ通りニ封セラレテ、コレヲ総ヘテ云トキハ、諸藩主トカ諸国首トカ称セラルヘシ、公・侯・伯・子・男ヲ総ヘテハ、次ノ侯ノ字ヲ取りテ、諸侯ト称セシ例ニ依ルナリ、又本朝ノ古例ニ依テ、総任国造ト称シテモ宜シカルヘシ、ソノ諸藩主、総任国造ニハ、各一門大臣ノ内ニ、一人カ二人ツ、朝廷ヨリ位階ヲ賜フヲ、命卿ノ例ニヨリ、ソノ名モ命卿ト称シテ然ルヘシ、

朝廷ヨリ時々巡察使ヲ遣ハサレ、ソノ政ノ得失ヲ觀玉
フヘシ、

天子ノ巡狩ニ代ルコトナレハ

朝廷ノ大臣、大巡察使ヲ兼任アルヘシ、諸藩主ハ時ヲ
以テ東京カ京師ニ述職アルヘシ、諸藩主ノコトハ、治
部省コレヲ掌リ、司藩察ヲ置キ、国司ノ制ハ諸県ニ移
シ、司県察ヲ置カルヘシ、サレハ封建郡県並ヒ行ハル
、ノ制ニナリテ

朝廷ノ紀綱弛マサレハ、僭上尾大ノ弊生スヘカラス、
此命一タヒ下タルトキハ、藩国ノ士民、共ニ安堵ノ思
ヲナシ、今日ノ恟々タルモ、忽暉々ノ民トナルヘシ、
是即棄王ノ聖劑ニシテ、万民信シテ服用スヘキナリ、
冊子原寸 縦二六・九種 横二〇・五種 一七枚

一八六二 山階宮晃親王ヨリ島津従二位公へ

年賀状、短刀礼状

二通

(包紙ウラ書)
一島津二位殿 晃

玉案下

一八六一ノ一

(封紙ウラ書)
一島津二位殿 晃

玉案下

猶々、春寒御自愛希候、凶書殿・備後殿・右京殿等
可然御伝声希入候、小松・西郷・大久保・両高崎・
藤井・村山等、自然御眼路江現レ候節、乍憚御鶴声
伏願候、不具、

新玉の目出度サ不可有際限候、御渾家益御万福様候、別
者尊官於本城、御加年之始儀式等、如吉例可被為行珍重
令存候、抑此多喜物乍少不相替年玉之印迄ニ令進上度候、
御笑留被下候ハ、千万畏入存候、尚期永日者也、

恐々謹言、

正月二日

文書原寸 縦一五・八種 横四五種

一八六一ノ二

(封紙ウツ書)
「島津二位殿 晃

玉案下」

不順之氣候、随分く御用心願候、昨春ハ毎々之転

宅致居候処、当春ハ自宅ニ而加寿安心畏入候、併

公用ニ候ハ、如何様之義も畏入候へ共、昨冬昨暮

并之事件ハ、扱々大息致し候、任御心易心事申入候、

御覽後急々は被投丙丁候様ト希入候也、

本年の節趣御多祥恐寿致し候、晃無為、乍憚御安慮存候、

扱去歳拜眉之節、深重御由緒の辺而、御紋の品希候処、

旧臘ハ御使小野半左エ門ヲ以而、望外之美小刀拝受、辱

令謝候、正晃より定麻呂江伝江永々山階宮家宝ト致候、則

一品老親王及定丸生母等江令見候処、老親王、抑舞生母海

岳御礼申居候、前文の旨、其砌り可申入至当の処、月迫

反而々々乍略義、年始呈書と令期候、乱筆不文、高免賢

察伏願候也、

恐々謹言、

正月二日

文書原寸 縦一六・一極 包紙原寸 縦三三・五極

横 四五極 横三九・六極

一六三 小松帶刀ヨリ大久保利通へ

大久保鹿兒島行ノ際大阪ニテ会見

(封紙ウツ書)
一 大久保老台

小松

机下

「

春陽之候益

御清泰奉南山候、陳は昨日は態々御来訪被下、緩々御高

話拝承、歎喜無限深奉謝候、しかし例之失敬而已仕候段

ハ幾重ニも御宥恕可被下候、已ニ今明日は御開帆之御都

合ニ可有之、幸天氣も平和ニ相成、別而之御都合と奉存

候、御暇乞旁参上可仕候得共、御存し通之容体背本懐候

段御高免可被下候、未余寒之候、遠路之事ニも御座候間、

為

邦家御自愛御尽力呉々奉祈候、紙包得能江差遣度御座候

間、乍憚宜敷御頼申上候、先は此段可得貴意如是御座候、
頓首拜呈、

正月八日

尚々、臥床大乱書御高免可被下候、

文書原寸 縦一七・九種 横九七・四種

○二八三 □□貞助ヨリ小松帶刀ノ病氣見舞

一八四 溝口從四位ヨリ島津久光公へ

藩政改革ノ件

(包紙ウラ書)

一島津從三位様

溝口從四位

玉机下

(朱印)

┌

仰出之

御旨趣茂御座候処、未熟之愚息、藩政向始兵制等何分行
届不申、方今之時勢深痛心仕居候、依之向後万端御依頼
申上、藩政改革振起仕度、窪田大参事・山崎権少参事差
出候間、当藩之情実御憐察之上、無御覆臆御示教被成下
候様偏ニ奉懇願候、猶兩人江委曲申含候、右為可得貴意
呈愚毫候、恐惶謹言、

正月廿三日

溝口從四位

島津從三位様

参人々御中

猶以未春寒去兼候、折角御愛重被為成候様奉存候、
且非薄之至ニ御座候得共、当地之乾海苔一箱入貴覽
候、御笑納被下候ハ、大慶仕候、以上、

文書原寸 縦一九・四種

包紙原寸

縦一七・九種

横二六・五種

横四〇・六種

一簡呈上仕候、春寒之砌、愈御勇健被為渡奉恭賀候、将
又、從

朝廷、追々被

六室 長州ニ於ケル諸隊騷擾一件

西郷吉之助写一冊

一我等不肖を以、祖先之遺業を辱しめん事を恐れ、焦心苦慮之折柄、先般家来一統之力ニより、数度之困難を凌キ、速ニ国家恢復之功を奏し、剩へ王政復古之御盛業を茂佐け奉り、遂ニ非常之

朝恩を蒙り、当家之面目此上無キ事ニ候処、不図も常備兵編制之行懸りよりして、不容易事態ニ立至り、種々鎮撫説論之手当を尽すといへとも、更ニ其詮も無之、畢竟双方之意趣を挟ミ候より、終ニ国内兩立之姿ニ相成、此時ニ当りて、其是非曲直ヲ正さんとすれば、双方申立之筋も有之、其末遂ニ干戈を動すニ可立至、一旦干戈相交る節ハ、人民之疾苦不大形、遂ニ天下之大勢ニも關係するは必然之事と深く痛心いたし候、か、る形勢ニ至るも、畢竟我等不肖より起りたる儀と実以残念ニ存シ、以往ますく反省する心得ニ候処、於汝等ニも、我等之心中を察し、我差図を奉すへし、此上

万一差図ニ違背するニ於而へ、奉対

天朝、我等之職掌も難相立、深ク恐入次第ニ付、職務御免相願、謹慎罷在覚悟ニ候間、篤く相弁、一統熟談之上、何分之儀可申出者也、

右二月五日諸隊江申聞、三日期限ニ何分之旨趣可申出候様と之事、

一此度旧長官御取持之義ハ、先般御父子様より被仰出候通、双方共既往を不問之御主意、素より不被為替御義候処、其方共入鴻(入心)以来入々申立候情実も有之候得は、不容易事件ニ付、枉而我等江御任せ被下候様御願申上候処、被聞召候付、旧長官江謹慎被仰付置候者之義ハ、丸々我等相預り取締可致覚悟ニ候処、彼等歎願之趣も有之、豊浦江罷越候由相決候、併彼等謹慎中令他行候而は、何分御所置可被為在候付、孰も旧官江帰り、鎮靜可罷在、此後万一分紜之事於有之ハ、御父子様ハ勿論、我等ニ於而も、奉対

天朝、知事之職掌不被為立、心外之至ニ候、此上益君臣之大義を重し、上下之名分を弁へ心得違無之様一統可申聞者也、

右御支藩方より諸隊江被仰聞書面之写

一臣等頓首謹白、先般兵士脱走、即今不容易姿ニ立至候事、兼而臣等誠心薄きを以、厚大之御主趣意を貫徹する不能より差起り候義真以奉恐入候、且先日來、所々士民沸騰、国歩之大難此時にて、何共恐懼之至ニ不堪、聊も数年來内憂外患引続キ、未曾有之大難ニ被為當、偏ニ尊攘之御主意を以四方之雲霧忽開キ、山河草木再ひ天日之貴きを仰くを得、終ニ

王政御一新之今日ニ至り、天下之基礎我藩ニ属する、素より不待言、就而ハ先般來御国内御改革、内ハ天下人士之方向を定め、外ハ洋夷之侮を禦キ、

叡慮貫徹、上下一致、不拔之業被為立度御盛意被為在、臣等実ニ感激罷在候、就中、兵制之義、天朝より被

仰出候廉も有之、乍恐臣等 叡慮・君旨を以感戴シ、隊伍精選規則改革、聊微忠を以鴻恩万一奉報度奉存候央、不図も諸兵脱走、兇徒忽チ其間ニ乘し、衆人ヲ煽惑し厚大之御盛意を不弁、或ハ暴威を以猥ニ廟堂ニ迫り、或ハ

朝廷之威敵を不憚、位官之人之墓を発キ、或ハ己之奸惡を掩ひ私怨を報せん為め、長官之者を執縛し、又ハ苛刻之罪科申立、其他国之法典を不顧のミならず、賞罰之大權を擾亂し、漫ニ人心を惑迷ス、是果て人臣之分ニ可有之哉、況や

王政御一新之時ニ當り、忽チ今日之勢を醸し、天下瓦解之基ひ、我藩より開き候事、恐多も 君上被為對天朝、如何御申訳可被遊哉、激怒憤慨之至ニ不堪、伏而惟るに、今日之事実、天下之国家存亡之機ニ関シ、臣等座視するニ不忍、聊身命を不顧奉歎願候、伏而願くハ此間確乎不拔之御誠意を以、一定不二之御国是を被為貫徹上ハ、

天朝并諸藩江被為對御失体無之様、下ハ邦家万民江被為對、偏ニ御雄斷敵命被仰出、不奉命者ハ直ニ罰シ、奉命者ハ速ニ解散被仰付度、天下之為メ國家之為メ、不堪懇願之至、即今四方人心洶々之折柄、粗暴之舉動有之候而は不相濟、同志多人数故、殊更謹慎ニ罷在んか為め一所ニ相纏ひ居候間、此段御届申上置候、誠惶誠恐頓首、

明治三正月

常備軍

各中

一臣等伏而今日之御親書を捧讀し、深ク 君上田城中之御憤懣を恐察し奉り、放声大哭、幾んそ生を欲せず、國家之事、今日之極ニ至り、其責皆臣等之罪、髮を擢とも其数を尽す事不能、先月中歎願書捧け候時すら脱隊之暴逆不羈、君臣之義を滅し、上下之分を乱り、政治を妨害し奉り、其佞被為捨置候而ハ、紀綱決而振はず、威敵決て不立、列藩共決て不相濟、

天朝決て御申訳無之、臣等感憤之余、断然出港仕候処、

其後暴抗益甚、終ニ公然 君意を悔慢^(悔)し、御屋形を囲ミ、強暴申募り候始末、古今未嘗有之大逆、是を忍ぶ可んハ、孰をか忍ぶ可からざらん、二州之危殆累卵之如し、実ニ御親書被仰出候通、切迫此時ニ過るなし、臣等仮令低首掩耳、漠然しらざる如くせんと欲するも、豈是を忍んや、独臣等而已ならず、二州之人士、少しく有気性者必憤然泣血 君威挽回し、御憤懣を露し奉らんと思わざる者あらん、臣等内ニ居て御屏幹^(翰)と相成る事能ハす、責てハ外より御援助申上置候義、臣子之心ニ御座候、臣等之所為決て輕拳ニ無御座、情之至義之尽処、不得止ニ出候義にて、

皇天皇土及び御祖宗様ニ奉對、決て愧心無之と存込候事ニ御座候、其父其奴之為ニ辱らるゝ、其子座視して救ハすんは其名義を如何せん、伏而遺憾之御深意ヲ奉体、輕忽浮淺之氣を歛め、重固深沈之略を持し、誓必成之功を期し、御遺憾無之様天地ニ矢ひ、鬼神ニ質シ危疑之心無御座候間、臣等之微誠、御黙照被下置候様

不堪悲願之至奉存候、臣等泣血吐誠誠感激頓首拜表、

庚午二月

海軍罪臣
各中

一臣等昧死再拜白、臣等愚陋之下輩、國家之事固より議するニ不足と雖共、苟も二州之地に生育シ、一日も君恩を蒙り候者、其報する処を知らずんハあるへからず、況や臣等祖先數百年來、厚大之恩沢沐浴し、自今御國家之大難ニ當り実ニ座視ニ不忍、平生之報恩則此時と奉存候、伏而惟るに、今日之勢歎息流涕、長大息いたし候而已ならず、積薪既ニ猛火に罹り、其命且夕ニ有之、此時ニ當て大喝一声、断然御所置なかるへからず、然ニ優々威權をして徒ニ凶徒ニ帰せしめ、毫も後日遠大之御策略無之、乍恐廟堂之御定算何とも難相同、臣等固より孤立、与する所なし、然共竊に善を善とし、惡を惡とするの志あり、今凶徒之所為を見るに、其大罪五ツあり、其他無數之罪科に至てハ臣等

敢て不言、一曰、賞罰之大柄を弄し、私怨を擅ニし、私恩を売り、己ニ与するものハ枉而登庸拔擢、其与せざる者ハ貶斥黜罰余す所なし、二曰、官庫を開、器械金穀を私す、三曰、猥ニ廟堂ヲ誹謗シ、彷徨無頼之徒を脅誘シ、良民を煽惑して渴乱せしめ、四曰、一定不拔之御國是を乱り、空疎無抛之暴論を建、私ニ使節を列藩ニ使し、奸惡之徒を結び、天下之大事を誤る、五曰、累世之恩沢を顧ミず、大節高義を弁へず、陰ニ周武商紂之経説を設け、恐多くも兵威を以 君上ニ逼迫ス、此五罪なるものハ、実ニ大逆無道、國家之逆臣、天下之姦賊、万一此徒をして其志を得せしむる時ハ、神州之滅亡、指を屈して待へし、臣等此兇逆之輩と共に天を戴ニ忍ひず、既而海軍全隊已ニ馬関ニ碇し、干城・照武二隊ハ萩ニ屯集す、廟堂不日御英断之日ニ當り、臣等傍觀座視するニ忍ひず、隊中有志之者申合せ、形勢便利之地ニ集合し、御國家之為め哀訴歎願仕候、敢而粗暴之所業等決して不仕、此上何分之御指揮奉

待候、此段御命令を不奉待、押而集合仕候次第、後日

御国家御恢復之期ニ至り、斧鉞之責逃所無御座候と奉

存候得共、何卒当今御国家且夕至急之勢、速ニ御救被

遊度、臣等愈熱之微勞所辞ニ無之候、誠恐誠惶頓首敬

白、

右二月五日支藩中より申聞候事、

一過日五日、恐多も 御直被仰渡候御書面之趣、諸隊一

統謹而奉得其旨奉命仕候、向後之義ハ何卒格別御寛容

之御所置奉願上候、誠惶頓首再拜、

右二月八日諸隊より申出之事、

正月廿四日

第四大隊

有志中

一旧臘已來諸隊江追々御説諭も有之候得共、兵士中折合

兼候由を以

御旨意貫徹不仕、御父子様不容易御苦慮被遊候付、

我等於ても御輔翼申上度、寢食を不安日夜參殿候得共、

其任ニ不堪終ニ此節之形勢ニ立至り、今日被仰出之

御旨意承知仕り、実ニ不知身之所措痛心之至リニ候、

各共ニ於て定而恐懼可有之候条、此旨厚ク君臣之大義、

上下之名分を弁明し、兵士一統感戴仕候様精々可申聞

もの也、

一二月九日晝、小郡・勝阪両口より末藩兵隊、山口表江

入込候を抗し、戦争ニ及ぶ、

一同日、左之通之布令

昨冬以来、諸隊之者共種々難題申募り、追々御説諭被

仰聞候得共、御沙汰筋を不奉而已ならず、剩へ兵器を

以御屋形を囲ミ、君上江迫り、或ハ大參事、監察を

拘留する等、其他暴逆至らざる所なし、乍併 君上ニ

於てハ、御仁恩之思召を以飽迄御了簡被為在候得共、

諸隊之不礼、天人共ニ怒る所ニして、君上御心事を

恐察し、義理之所不得止、遂ニ所々義兵を揚げ、不礼

之諸隊を討取候次第ニ付、下々ニ於ても心得違有之間
敷候、然共諸隊中たり共銃器を差出、帰順せしむるに
おひてハ寛大之御所置勿論之事、

一同十日、勝阪口戦争、

一同日、諸隊討伐出馬之有令、

一同十一日、小郡・勝阪両口官軍不残山口表江押入候
事、

一同十二日ニ至り、諸隊降伏、銃器差出候人員凡千五百

人、同日古熊辺残兵探索之節、小迫合ニ相成候事、

一同十三日ニ至り、先平定、併残兵徳地辺山口ヨリ道法六里余逃

去候者凡二百人も可有之候得共、追々降伏之様子ニ相
聞得候事、

一都濃郡宰判呼阪ト申所ニ、遊撃隊二小隊脱走、追々募
兵候様子ニ相聞得候付、不日追討之手筈ニ相成居候事、

檄

下を以上を犯すハ

朝廷之大憲、力を以理を滅するハ天地之重罪、此二者を

名つけて逆臣乱賊と称す、逆臣乱賊ハ天下人々之得て
誅する所也、去冬脱隊之騒乱を原するに、兼而

天朝より被 仰出たる

御趣意を以、国内之制度改革被 仰出、御両国を以、

益

天朝を輔翼被遊候、

君上广大之御盛意ニ悖り、兵隊一時脱走、付和雷同、

千百群を成し、其一己之私欲より国家無限之騒擾を引

出し、山口両道之関門を奪ひ、数十之砲台を築き、農

商之私財を掠め、官庫之金穀・器械を窃ミ

朝廷官人之墳墓を毀ち、無罪之兵士を捕縛し、愚民を煽

動して全国に蜂起せしめ、己か悪を掩んとして、長官

の刑罰を議し、御国是を誹謗して官員の黜陟を論す、

蓋其恃む処兵力に在り、以て 君上政府を圧し、君

威を破壊し、政治を攪乱し、賞罰を盗ミ大權を弄す、

其罪惡深重、東海之水を以て之を洗ふとも尽きかたし、

然るに 君上如天之広仁を以て、其無知を憫ミ、親か

ら銃砲紛錯之間ニ立ち、百万説諭、決して前罪を不問
とまで被 仰出、四藩

君公に於ても往来奔走、鎮撫之力を被為尺候得共、巨
姦大猾其間に出没し、兵士を揺惑し、先非を悔悟せさ
るのミならず

君意を蔑如し、凶器を舞弄し、番兵を分遣し、農兵を
欺誘し、恣ニ佐々並ニ出張し、終ニ正月廿六日、千余
人を以御屋形を囲ミ、出入を絶し、

君上之御膳米を茂閉ち、強詞奪理、

君上ニ逼り奉り候に至り、実ニ狂暴凶逆、天地も覆載
する事能はざる処、誠に看よ、上下古今数千年の間、

如此之逆臣、如此之乱賊ありや、苟も人心を存し、耳
目ありて今日之形を見聞するもの、誰欤感激憤懣、其

肉を食ひ其皮に寝ぬるを思はさん、嗚呼

朝廷之徳意、何を以か徹せん、藩内之政權、何を以てか
立ん、

君威何を以挽回せん、紀綱何を以て振作せん、紛乱此

極に至りてハ、只一刀両断之決あり、素より

天兵御征誅被 仰出候は、必然不日之中に有之候得共、

片時も難捨置、四藩を首とし、二州間忠憤義烈之士、
大義に依り精銳を尽し、順を以て逆を討ち、衆を以て
寡を誅す、必摧陷廓清之功を奏し、

君上之御憤懣を光霽し、春風和氣之域に復せん事、其
期遠き非ず、邦内之士庶名に眩せず、実に迷ハす、理
を奪ふの力を畏れず、

上を犯すの悪を助けず、順逆を弁し、方向を定め、

唯 国家之急難

君上之定意に注目し、不義乱賊之名を取り、千歳之辱
を貽す事なかれ、故に檄文を伝て以て瞽盲之耳目を驚
すもの也、

冊子原寸 縦二四・三種 横一七・一種 一六枚

一八六六ノ一
〔表紙〕
「上表」

一八六六ノ一
薩土河野残夢ノ朝廷ヘノ上書

東京ハ皇都ノ地ニ非ス

同文二通

今般待詔局被為開、草莽卑賤之者ニ至る迄、御為筋存付候ハ、無忌憚致建言候様、御布告を以普被 仰出、実以難有機會之 御趣意と奉存候、就而は遠鄙卑賤之士族、誠ニ奉恐入候得共、遇難有被 仰渡ニ、屹と宜敷迎も存付候を其仄に黙捨仕候も却而不忠に相当候半欵と奉存候間、誠恐百拜して此ニ奉申上候、

太政官日誌を拜見候に、去ル辰年以來、列侯土地人民版籍奉還之建言有り、情見するに、悉ク其藩主の本心より産ミ出せし事ニ候哉、文面字配等博学多識ならてハ調ひ難しと覚ゆ、然らハ藩々総而如此識者而已有らん事とも思ハれず、多分近臣又ハ重職、或ハ時を得し

徴士等の者共、己れか為ニ其主を推動して出せしも計られず、万々一其通有りとせハ、君臣不同心上、是迄国主城主等と仰高せしを、俄ニ藩知事の名目に成り候てハ、文盲卑賤之者ハ、僧職の様に聞違ひ、且国主城主と申より遙ニ位劣り、士族同列杯と心得なハ、主威自然と衰廢、遂に臣下を指揮する事不能様ニ立至り而ハ、藩中混雜到来の基ひならん欵、若シ此事増長するニ於てハ、其害恐らくハ 朝廷に及ハんも計り難し、然る時ハ、日本国中一致とハ、乍恐難申乎、故に是迄の通、国主・城主・在所持の名目ニ而、此節別段從朝廷御封土に相成り、藩臣ハ其藩主に從て徳川執政の時の節、百姓・町人ハ其仄ニ而、藩士計り從ひ行なれハ、此両民ハ 王民也事其時より顯然たり忠を尽し、君臣義和して、領内能ク治り、四民各其所を得て、これか業を楽ミ励ミ尽力し、而して藩主其義臣哲士を率ひて天朝に忠を尽し、至誠を以守護する時ハ、是則勤 王ならん乎、然る時ハ富国強兵求めずして、其内より自然と生ずへし、中庸に、上天の声も無、香も無ク至れ

り、と有る所ニ御聞議有りたしと、乍恐奉存候、仮前
文通藩々万一紛乱に及ひなハ

朝廷誰と俱ニか国を治め玉はんヤ、亦之を押動し、或
ハ主より越し位階等を自等申上て受る者に伊尹の志有
るヤ不知、扱右建言書中ニ、御鴻恩を蒙りし身也ハ、

為御国家安眠せずと記せしも聞々有り、いかゞ其通也
ヤ無覚束、既に去ル辰の初春、京畿大變の時、於各藩
（旨意）
鼠首兩端の人多キ而已ならず、賊の勢ひ強キに困從す
るも不少、然るに如此勤

王に苦心する筈無し、何れも其奥心にハ外に一物有る
へし、此書に不限、近代ハ書面ト実事口上と、内心大
に齟齬する事多しと聞、是輕薄の外見飾りより如斯歎、
故ニ度々難有 御趣意の被 仰出も、下々迄不轍行也、
何分糞土を錦の袋に入れしか如き悪弊を御裳濯川の清
水を以洗ひ流して、御政行有りたし、何れ至誠也こそ
第一也へし、我 大神宮の御教も至誠也、彼の語に、
子貢政を問ふ、子曰、兵を足し食を足し民信すと、又

問ふ、此三ツの者に於て不得已して之を去ハ、何をか

先きにせん、曰、兵を捨ん亦食を捨ん、古より死有り、
信無之ハ民不立と有り、然らハ日月の運行する界に於
てハ、至誠より外ニ道有るヘからず、去ル已四月廿九

日大原重徳の上表に、此等之事言ひ尽せしと覺て、不
堪感激、依之委細ハ不申上候、亦權武家に渡りし事ハ、
（新井白石）
荒井君美か著述の読史余論ニも粗見ゆ、聖語ニ人を以
言を不捨、言を以不捨言と有れハ、機會に應じたる事

ハ不改して其佞御採用有りたし、是則悪んて美を知り、
好んて悪を知るの無私公事ならん乎と乍恐奉存候、
一本庄内の酒井・本盛岡の南部両家、七十万両も出金し
て旧城に帰住すと、是

御聞議の上、被 仰出し事也へし、然れとも遠鄙の小
民共ハ雲上の事能々も不知、勿論実否不弁して、朝敵也
ハ、両家共断絶、重職をハ伏誅こそ至当也べきに、如
此也ハ、いか也故そヤ、向後ハ劍槍を取而君父に手向
ひ疵を付ても、出金セハ被許もせん歎、其外書に記し

難き巷説多シ、是右の両家為征討、跋渉して父子兄弟等を討候事、者共一入いふと聞、女子と小人ハ養ひ難きと有れども、恩愛の情等に迷ひ、如此不当の風説有るヤ不知、是ハ扱置愚考にハ此両家より出る金ハ、元來我國の者也ハ、於 朝廷ハ、會計方御積金も等しき乎、同くハ、両家は迄領せし地の四部の三ツ丈ケ御取揚ケ、其所務米を以、外債等の料に御備置相成りなハ、拾年に至さる内倍也へし、然る時ハ右様賤しき巷説も絶、億兆の臣民も安堵せん乎、此両家ハ領地都而御取挙相成候而相応の者なれハ也、扱建久より六百余年、絶て久しき 御復政ニ而、遠鄙の賤民を始て 朝廷の篤キを稍覚する機会也ハ

聖上の御大事、方今より大也ハ無しと乍愚も奉存候、建武等の賞罰得失、御勘考之御精議恐多も奉念候、

一同誌ニ静寛院宮と有るハ徳川家茂か夫人也にヤ、不知、貴賤に不依、女子嫁してハ夫トの内を我家と定るハ、和漢俱ニ上古より不易之礼と聞ケハ、早ク徳川家に御

帰住有りて、夫ト家茂か魂ハ勿論、祖先の靈を朝夕祭り、次ニハ其子孫を慈愛し、婦礼を尽し、子孫ハ是に孝養せハ、是そ一家和樂して目出度事ニ而、人倫の道も可足にヤ、夫れ夫婦ハ人倫の初め、易に坤道夫れ順ナル乎と有り、

一徴士の内、主人より位階越へしも有りと聞、然る時ハ前に記せしか如ク、主威日々に廃消して遂ニ臣下の管轄も不出来様立至りなハ、何れ主意に不平の氣生すへきハ案中也ハ、不遠内藩家に混雜の事到来すへし、扱下参与等勤るに、無位階して不濟事有りもせハ、七位或ハ六位の藏人如キニ而御召仕候ハ有度者也、四位、三位等ニ而、方今下国せし徴士等を見るに、さも可恐を不知、是迄の祝部等か官位の如ク也ハ、位至而輕ク成れり、之か積りくゝてハ、遂に

朝廷を仰き尊ふ事も亦輕ク立至りなんも計り難し、然らハ何れ 天朝ニも是迄之通り、大宮人の差立たる成より上官を勤め、其徳の至及せさる処有りもせハ、其

次家より副役して之を輔け、亦徴士等の内、篤実也者と才智の働キ有る者と混交して、其下に御召仕ひ有りなはいかゝ可有御座哉、何れ 皇国ハ 皇胤貴族を尊ふ真心あれハ、有才とて下賤より多ク挙玉ふ時ハ、万民誠忠の心薄く、仰き尊ふ事も自然と疎に成り行なんも計られず、此弊出る時ハ、其害恐多くも 朝廷ニ迄及はん欤、依之前条申上候通、藩々義和して領内能く治り、之を率ひて 朝廷を守護有りなハ、順序して上下一和の基ならん欤、松平少将の版籍奉還の書に其節目を大事に記ス、乍憚至当ならん、

一勅命を奉し、徳川家より執政有りし嘉永の末より志しを立ると見江し士ハ、西洋人といへハ、善悪理非を不弁論攘夷くくと匈りし人に限り、御一新後忽チ打替り、彼ハ有信義者也ハ開港くくと喧し彼か書をみるに稱もすれを能々考ふへし、有信義者の非ル心術ニ事顯然た、併是ハ臨機応り、実に虎狼也ハ、何れ礼智ヲ以会釈すき者欤、併是ハ臨機応変也へけれハ、恐入罷在る也、然れとも、甚しきハ衣服飲食容体等、寒暖風土の弁へも無く、種々託して之を

真似、異朝異様の事とも多し、上古仏法我が国に渡りし時、迷陥せし人々 大神宮の御戒を破り、世変と唱へて彼を真似、剃髪せし世態も、是程ニハ有るまじと思へり、夫れ仏法ハ無我無欲にして、慈悲善根を基とす、方今の西洋法ハ邪宗有れハ、一利と兵を基とす、後入用心有りたし、後年此道に弊出る時ハ無罪の人多死、力弱キハ妻子を被犯、資貨を被分捕等の事多有らん乎、然る時ハ、仏法より害甚タ暴にして、禽獸に等しき様ニ立至りなんも計られず、彼等富国強兵を国礎と称するハ、我國の美風を失墜し、追而利欲に眼を暗ませ、上下の和を破らんか為の釀計也と聞、不知、大学に徳ハ本也、財ハ末也、本を外にし末を内にすれハ、民をして争ハしめ奪ふ事を施す、孟子之を含んて、王何んそ利といふ、又有仁義而已、上下こもく利を取りて国危し、不訾ハ不飽といへり、今ヤ西洋僻好の駄舌の人、孔孟之道を誹謗する者ハ人に非れハ論するに及ハす、

一西洋人当分有信義様ニ而無事也とも、永年如此ヤ無算

東、我國を以彼等と同盟するハ、繼ニ二万石の地を以て、百万石の領主
束に交るか如し、後年彼に不及事到来し、是等より逆に變を生ずへ
し、といふ人、夫れ平安城ハ海浜より僅十余里距離すと
有りと聞不知

雖も、中途に所々山川の要地有り、加之す、近キに叡山
等の因拠有り、万一後年變事到来して、夷賊等川尻・尼
ヶ崎等を塞キなハ、兵卒糧米等北越奥羽等の国々川々
を下り、越前敦賀津辺より上陸し湖水を涉りなハ、不
日に京着せん、彼亦北海を塞キなハ、我転し、美濃尾張
等を経て京着せんも調ふへし、是に反んして東京ハ海
近ク四方広野にして要地無し、筑波日光等有れとも遙
ニ遠し、只依頼する者ハ城一也古へと違ひ、方今ハ大砲多
すに成り、然れとも、四方より被取囲てハ危キ事に非す
と聞、然れとも、四方より被取囲てハ危キ事に非す
ヤ、何れ奥深き山統キの地こそ宜しかりなん、且ツ東
京ハ水悪しく、殊ニ湿地也ハ病を生ず、旁以
皇居の場所に非す、加之す、横浜より品川辺迄ハ海路
一時ならずして渉る、万一夷人變を生して、格外也事
到来せハ如何せん、早ク京都に
御還幸有らん事を、而して東京にハ大凡八ヶ年限等ニ

而交代する鎮撫使を被置、相模以東十ヶ国余も管轄有
りたき者乎、万一後年東国に變有りととも、外夷より大
ニ鎮治易かるへし、此節の事ニ而推知すへき欤、我國
人の叛を怯れて外夷の變襲を不念ハ、父子兄弟を疑ふ
て、他人と同居するか如しといふ人有りと聞、

右条々卑賤之私建言仕候儀、実以恐疎至極ニ御座候得
共、難有

御趣意ニすかり、此段上表仕候、誠恐誠惶謹言、

薩摩士族

河野残夢

冊子原寸 縦二八・一横 横一九横 七枚

一八六六ノ二

本文書ハ一八六六ノ一号文書ト同文ニ付省略ス

冊子原寸 縦二六・六横 横二〇・三横 七枚

一六三 横山正太郎依願退職ノ件

横山正太郎
(安武)

右ハ変ニ臨ミ職掌ヲ忘却シ候次第、学問ノ詮全ク無之ニ付、敵罰可申付ノ処、寛宥ヲ以故障申立、当職断申出候様可相達事、

文書原寸 縦一六・六種 横一七・九種

一八六 岩倉具視書翰 宛名不明

藩制取調一帖写ノ件

(封紙ウツ書)(欠損)

殿

具視

ノ

ノ

藩制取調一帖写之分一覽候間、則御廻シ申入候、明後日ハ御持参可給候也、

四十九

文書原寸 縦一九・五種 横三三・一種

一八七 耶蘇教徒四千余人中二百余人薩藩へ御預ケ

ノ朝議

(端裏書)

「別紙長州之布令文」

今般木戸持越候由

太守様より御側廻御使者御直書被遣、(毛利敬親)大膳大夫様ニも去

十一日御登京御出帆相成候由、右御使者ハ京而度々致面会候人、尤此已前山口江茂見得候人ニ候得共、名前は失念いたし候と、木戸申候由、

此度木戸当所江参候御用向は、専邪宗党御処置振之事ニ候よし、四千余之党類諸家様三拾余ヶ所江御預ケと申事、右は京都にて最早御達為相成哉ニ御座候、御国江茂式百人余とか、扱ハ御迷惑之ものニ御座候、熊本何か混雜之物首御座候、御家中ニ派立、六かしき趣ハ無疑事と相聞得、当所出張之諸生杯ハ老人も不殘引取申候、

右御心得ニ申上候、已上、

文書原寸 縦一六・一種 横八一・八種

一八七 大山格之助ヨリ仁礼新左衛門へ

(封紙ウツ書)

「仁礼様 大山」

昨日は態々御尋訪被下御厚志不淺奉謝候、至急之御事は御繁忙奉推候、然は御訪之儀御頼申上事御座候得共、兼而御承知相成候仙藩三好^(監物)・天童^(采入)之吉田兩傑之儀、昨春於東京情実屢建言も致、大久保專只管尽力ニ而書翰并絶命之件も差出置候末、從

天朝被為取行候御賞典、斯く大義を突込候古今ニ不愧人物、如何ニも度外千万之至、尤青史ニ於而后を玉石不分明に候得は、如何なる識者之議論も難被衛、実ニ遺憾之至ニ御座候、尤西郷等議論も別紙申来候間、篤と大久保氏江御討論被下、且ハ川村^(細巻)・黒田氏等も自然存慮も可有之哉ニ御座候間、是非西郷論ノ如ク御再賞被行候様御尽力被下度、兼日以序差出度含居候処、得幸足下へ委託仕候間、偏に奉希候、此段勿々得御意、以書中御暇乞旁如是御座候、恐々謹言、

臯月廿日

大山格之助

仁礼新左衛門様

文書原寸 縦一八・三釐 横一六一釐

一七二 大木喬任ヨリ岩倉大納言へ

謹而奉拜誦候、昨日被仰聞候橋爪某御用留云々行違之義、早速和歌山藩大属津田某呼出シ、前以行違之義申達候処、頻ニ帰藩為致度義縷々申述候得共、并而政府より御達し相成居候、行違候義有之間、差戻し候段相達シ、別紙之通和歌山藩並本人ニも相達し置き申候、実は吉井大丞よりも略承り罷在候処、不心付ル内省申候所御用留さし免不都合相醸シ、恐縮之次第奉畏入候、此後尚和歌藩より申出候ハ、御端書之通相心得弁解可仕奉存候、此段為可申上候、又々如此御座候、九拝頓首、

五月廿一日

大木喬任

岩倉大納言殿

執事御中

文書原寸 縦一九・五釐 横一〇五・五釐

一七三 広沢真臣ヨリ大久保・副島・佐々木へ

参議辞任ノ件

(封紙ウツ書)

『第二号』

大久保様

副島様

佐々木様

広沢

御覽後御火中

ノ

ノ

天氣濛鬱、炎熱尤酷敷有之候所、弥御忠壯奉敬賀候、扱

は拙生昨日来之暑氣ニ被庄候故欵、頭痛相悩、今日は不

参仕候間、万宜様御取計奉頼候、昨夕巖(岩倉具視)相公江参殿、

御一同言上仕置候儀ハ、其情実尚徹上仕候様御尽力奉仰

願、素より一朝一夕之事ニ非ず、随分難堪を堪、難忍を

忍ひ、戮力同心と申所は相当心配仕候末、今日ニ到り、

尚前途之事熟考候而は、是ニ而弥勉強可仕との目的不相

立、畢竟浅劣之小生、狼ニ要路を妨害よりして、百事沈

滞之基不相濟次第、不堪恐懼之至、又は夫か為め有力者

を相拒む之世聞之罪茂難免、只々誰今之形ニ而は実以政

府因循之責万々、就而は、断然御精選之上進退被 仰出

度、勿論安地を求め、不平を申候様之儀は、誓而無之、

今日之

御盛事に立至り、殊更莫太之

天恩拜戴仕候上は、生涯万分之一を茂奉報度素志ニ付、不

肖相当之御用ニは、無官たり共屹度相尽、政府之御旨意

をは相通し候様仕度心得ニ有之、其辺ハ重疊、右府公は(三条実美)

しめ、亜相公方御心配不被為在様奉懇願候、右今日不参

御届之序ニ任せ、尚素願先生方迄申上、御序ニ宜敷御噂

奉願候、当時御頼申上、半途之身柄ニ候得共、奉職中は

御用欠不仕、快方之上は明日は参

朝可仕奉存候、為其、勿々頓首謹言、

六月廿三日

文書原寸 縦一六種 横一八一・七種

一三 普仏戦争情報

今日仏蘭斯軍艦々長及び同国新旧コンシユル兩人江面会、

「フランス」と北独逸^{則チ}フロイス^ト、此節戦端之起り承候
処、是ハ伝信機ニテ報知、いまた政府之確信ハ無之、乍
然事実無相違候、其起りハ「イスパニヤ女王を同門閥
ゼネーラルプリ^ン連中より、昨春が追出し候後、門閥中之
スト唱ふる者共
評議ニテ「ホルトガル」王之父を立テ度、或ハ前フラン
ス王胤を立テン、或ハ「イタリヤ」王族ヲ立ント、諸方
相談ニ及候得共、只仏帝之忌諱ニ触レン事を恐れ、其事
調ハス、亦当帝ナポレヲ^ンノ甥ヲ立度相談ニ及ひシニ、
許サス、於是北独逸フロイス王族^カ相談セシ処、第一
「ビスマルク」ノ論ニテ「イスムニヤ」ヲ継カスルニ決
セリ、然るを仏・英共ニ其事ヲ難スルニハ、今フランス
北ニ「フロイス」アリ、南「イスパニヤ」エ李王族ヲ遣
シ、叔姪ノ国トナラハ、フロイスノ威勢たとふへからず、
加ふるニ歐羅巴中ノ争乱絶ゆへからず、亦英ニハ「イス
パニヤ」国内地中海峽ニある英属「ジブラルタ」ノ西ノ
害ニ妨げあらん事ヲ憚り、種々北独逸之議ヲ拒ミ仏老甚
シト也、猶英仏ノ内評ニハ、今ヤ北独逸ト魯西亜同心協

力ノ処ニ、イスパニヤヲ掌握シタラハ、海軍如何様とも
治らるへし、然る時ハ、十余年前黒海「セバストホール
ノ戦ニ、魯西亜ハ黒海ニ軍艦ヲ繋ク事ヲ禁したりシモ、
自然ト破るゝニ至り、亦イタリヤト結ぶ時ハ、地中海・
印度海迄も手を延す事縦横なる疑ヘカラス、然レハ、強
テ留メされハ、英仏ノ不利、一朝一夕ノ事ニアラスト、
又英ノ海軍ノ為無量之妨害あるへし、且又、英ノ海軍ノ
^{地中海なる}為、^{英等}マルタ^{英等}ノ要害有リトイヘトモ、魯・李・イスハ
ニヤ・イタリヤ同国固結シタラハ、何ノ用ニモ立ヘから
ずトノ下心モありて、英仏段々不同意を言ひ、仏ハ心戦
ヲ期シ拒ミシカハ、終ニ事破れ、彼ノ七月十五日終ニ戦
に決セリ、シカシ此戦争ハ仏ト李と也、外国ニハいまた
双方荷担ノ色ハ表面ニ見ヘず、尤仏ト李とは、四五年來
蘭領「リキセンフルク」ノ地一条ニテモ、既ニ争端をヒ
ラカントシ、今ニ始メタル事ニテハ無之ト也、彼ノ七月
廿日、仏領北方「メス」^{地名}江ナホレヲ^ン兵ヲ引テ出陣セ
り、

戦争ハ二三ヶ月ヲ出さず勝敗分るへし、他なし、利器あるヲ以テ也、しかし跡甚六ヶシカラシ、

北独逸も先年「ヲーストリア」トノ戦争ヨリ国債夥しく、半年又一年兵ヲ出ス事難かるべし、追々之便、実地取合ノ絵図来るべし、いまた実地ノ左右ナシ、

イギリス・ヲーストリアは仏ヘ荷担すへし、魯は内心分す、北独逸と結へる、疑ふへからず、「イタリヤ」モ同国すへし、

魯・李・伊・意結ひ候得ハ、歐羅巴近辺ハ論なし、東ハ支那・朝鮮ニ魯ヨリますく、地ヲ広メ候時ハ、宇内ノ三部式ヲ併呑シ、英・仏ノ強兵もいかん共仕難かるへし、是全ク今度仏ノ固ク拒ム所以也、

問テ云、戦ハ国ノ大事、然るを人ノ国ヲ継カスルトモ、広ムル共勝手たるへし、我が与カラサル処、然るを、強テ留むるハ、私心ノ甚しといふへし、況ヤ戦をヒラクヲヤ、何之名義条理ありヤト、彼云、成程尤也、いまた委き報知を得ず、細状ハしらす、伝信機ノ大略如此ト也、

庚午七月廿日

今日日中、北独逸軍艦之長并コンシユル江面会之筈、又彼トハ仏ノ不条理を可申、

右北独逸艦ハ支那海ニ有シを、別仏李戦争ノ確報来らハ、既ニ天津の事も何か動静量り難シ、先ツ長崎辺江廻艦可然とて、三日跡廻りたりと也、

天津一条、一篇ハ面動起るへし、此涯ハかくあらん、仏人共一時之咄ニ付、事実大小間違あるへし、

龜図添文、

仮リ龜図

一 フランス領北方「メス」ハ北独逸ニ近シ、

一 フロイストフランスノ境ニ「ラン」トイエル河アリ、

最早フロイス勢ハ其河ヲ越ハ仏領ニ入、鉄道等ヲ毀テ

リト、

一 蘭領リキセンフルクハ北独逸領近傍、仏ト李ト計ヨリ、

右ニ付儀要地之由、

冊子原寸 縦二七・二種 横一九・八種 六枚



〔公函〕 野村彦四郎ヨリ久光公へノ上書

横山安武慰靈ノ件

〔表紙〕
「上」

今般横山某、大政之不是ヲ歎シ、身ヲ献シテ奏諫スルニ拾ヶ条之事ヲ以テシ、付スルニ朝鮮征討ノ事ヲ議ス、条皆時勢之大弊失事ヲ矯ムルノ要件、忠心湧出、誰カ此ノ誠忠ヲ美歎セサラン、誰カ又此ノ志ヲ継サラン、伏テ惟フニ、横山述ル所ノ如キハ、世人モ蓋シ憂処ニシテ、然シテ未タ誠忠如此ニ至ラス、独切ニ

神州大基之衰敗ヲ歎シ、終ニ此挙ニ至ル、実ニ至誠純一、忠義ノ魁ニシテ、人心ヲ感動ス、嗚呼忠臣ヲ失フモノ何ソヤ、唯徳政之至ラサル処、忠諫納レラレサル処ニ是ヨル、古ヨリ忠臣多ク斃ル時ハ、国家之事概シテ可知、実ニ大事ノ時運ニ御座候、然ルニ 五公子唯深室之内ニ在シ、更ニ世事御研窮ノ道無之、臣之深ク憂処ニシテ、又

世人ノ疑惑奮慨スル処ニ御座候、横山某常ニ此事ヲ歎シ、終ニ昨年

(島津忠隆)

悦之助君ヲ勸メテ長州ニ至ル、未タ幾ナラスシテ、山口

變動ノ挙アリ、于時横山、聊 尊諱ニ触レ、

公子又御婦リニ相成、是偏ニ

君之御思召ニ出ルト、抑當時ハ是レ何ノ時ソヤ、王政ハ已ニ一新ノ名アリ、而シテ未タ其実不挙、人心洶々、日ニ王室ノ衰敗ヲ歎スル時ナルヲヤ、然ルニ、

公子何ソ都下他邦ニ遊ヒ、艱難ヲ経玉ヒ其慮ヲ広メ、時勢ニ博達シ、上ヲ匡スト衆ヲ御スルヲ以テ任トシ、而テ皇国ヲ振ハシメ給フ之事ナキヤ、臣実ニ日夜歎息スル処ニシ、敢テ不忍黙止ナリ、冀クハ

英明、横山ノ至情ヲ憐ミ、其志ヲ達セシメ、又臣ガ微志ヲ納レバ、国家之幸甚也、臣誠ニ至愚ト雖モ、不窮之恩沢ニ浴シ、寸毫モ邦家ニ尽サント欲シ、偏ニ国家ノ事ヲ歎キ、又横山之誠忠ニ感激シ、其忠魂ヲ慰セントスルニ切ナリ、慨歎ノ至ニ堪ヘス、誠惶誠惶頓首以言ス、

未八月十三日

野村彦四郎

冊子原寸 縦二五・一種 横一六・九種 五枚

一八五 向井新兵衛ノ北海道開拓建白

(表紙)
明治三年午八月廿二日

岩村開拓判官殿江差出候建白書写

向井新兵衛

口上手扣を以建白仕候

私儀

実弟和田彦兵衛^(秋道)、昨年於箱館ニ致戦死候付、墓参且北海道経歴之賦を以、於藩ニ願濟、長官殿江從隨、着函之處、不計十三等出仕拜

命、未經歴も不仕為指目的も無之、誠ニ以長縮之至、如何様尽力奉職可仕哉と、日夜苦心至極ニ罷在候、唯松前海官所江素位之勤仕而已、実ニ恐懼之至ニ御座候、陳は、当世態富国強兵之大二件御至急之御時節と、乍

恐奉存候、依之至愚迂遠之目的ニは御座候得共、富国之愚策、不憚忌諱左ニ申上候、

一北海道之儀は魯人日々蚕食ニ迫り、不容易御場所柄之事ニ御座候間、至急人才御採用、御開拓之功速ニ相立候様、御精力御専務之御事ニ可有御座、右ニ付熟考仕候ニ、其人存則其政拳、其人亡則其政息云々、夫政也は蒲盧也と、実ニ万古之確論と奉存候、当時開拓官員中、口ニは和漢洋之事を談シ、今日之庶務も精勤御用弁いたし、言忠信ニ似り、行ひ篤敬ニ似ると雖、其心中を暗察するニ、奸佞にして盗官之徒も可有之、又口給を以人を欺き、利奸を計る之者も可有之、右等之者は、兼而御明察有之、其上監事之御職掌も御座候間、御掛念も有之間敷候得共、右二奸之者無之とは難申上候、古より大奸ハ忠臣ニ似りと有之、往々賢明之人ニも失策無にしも非ず、依而向後尚又御明察之上、右等之者は早速免職被仰付度、万一奸徒之者官員中ニ有之候而は、御開拓之功決而御成就有之間敷、依而誠実之

人才数人、速ニ御撰挙第一御至急之事と奉存候、何れ上たる人は明之一字大眼目と乍恐奉存候、

一 於箱館ニ毎年外国人江貿易之煎海鼠・干鮑・昆布等、更ニ開拓使御計を以、惣而上海江御差送相成、彼地ニ而御壳渡相成候ハ、当分税金御取立より過分之御利益可相成哉、右ニ付、蒸氣船壳艘御買揚相成、航海之節は是迄外国船同様之向を以、箱館より東京迄、東京より神戸・長崎・上海と飛脚船ニ御仕立、北海道産物運送相成候ハ、航海之御入費過半相補可申、左候而上海江は商社御造立、官員三人位、英・支那之通弁官兩人、誠実巧才之商人五六輩、兼而在勤被仰付置度御座候、右御仕送之品々、即ニ御壳渡相成候而は、御利益も相減可申候間、自から好機会を以貿易^(磨滅)□相成候間、彼地御買入日本要用之品、且商社御造立金相応無之而難相弁哉、右之本手金、東京・大坂等富家之町人江出銀被仰付、本人又は手代之間、前文五六輩之内ニ御繰入、彼地江御遣相成、相当之利分被成下候ハ、無異

儀出銀可仕哉と奉存候、併当年之儀は、至急ニ罷成候間、為御試箱館富家之町人兩三輩ニ出銀被仰付、当人欵又は手代共之内より持越候様被仰付、官員兩三人・通弁官兩人御遣相成、彼地形勢情実巨細御探索之上、御壳渡相成候ハ、相応御利益可有之、且又来年商社御創建之砌、旁御都合可相成哉と奉存候、何れ富国之法は外国より利を得るを専務ニいたし度御座候、我 国内而已之利益ニ而は、富国之良法とは難申上度御座候、且又彼地は外国船輻湊之場所ニ御座候間、格別之御利益無之とも、万国之形勢情実探索之一助ニも可相成候間、是非共上海江商社御造立相成候様奉懇願候、

一 開拓御場所江御仕送之米穀・諸色一切之品は、東京・大坂会所江尚又御委任、且又誠実巧才之商人五六輩ツ、被召仕、下直之品御買入相成候様御吟味有御座度、且北海道御仕送之品は、前文蒸氣船運送序ニ函・松・江之三港江運送、諸所漁獵場江は右三港より御仕送、且又北海道産物諸品は右三港江兼而御備置蒸氣船着次

第産物積入、東京・大坂其外諸所江廻漕相成候様仕度、右之御手配は三港海官所江御委任被仰付、諸入費は三港税金之内より御用途相成候へ、御用弁可仕哉、蒸氣船港々江長滞在相成候而は御入費も不少、弁利之船も不弁利之船と罷成候間、長滞船不相成様兼而御手配第一と奉存候、

一前条之策申上候は、当分漁場開拓使より御関係之場所も有之由、其故無抛申上候、併向後左之通御採用相成候へ、前条之策は全く無用之儀ニ御座候間、御推覧可被成下候、扱是迄之漁場請負人は奸商之者共而已ニ而人民之飢渴ニも相及、且御開拓之妨ニも相成、旁無余儀次第ニ而請負人被廢候御事欵と奉存候、併漁獵其外産物を官より御取扱有之候手数は、商人共取扱より手段致相違、御算数通参兼御損失之事多く有之、却而御開拓之御利益も空算と罷成、御改革も其功を不見、下民は憂愁之色を顯シ候事ニも可至哉、商法之次第、官より御取扱有之候而茂、御利益無之とは難申上候得

共、官員之人々其任ニ絶へ候者共迄、御召仕無之而は御算数通至り兼可申、基より商法之儀は商人之職掌ニ而、老農老圃之確言ニ可有御座、私当地参着、直様右御改革之次第致承知、実ニ御失策欵と乍恐奉存候、於弊藩ニも度々右様之事件有之候得共、一として其成功を不見、初め官之算数至当とは御座候得共、施行以來皆算当致相違候、是以取扱之商人ニ不及処よりと相考申候、依之、以後は誠実之差配人被召立、二八之税金御取立相成候へ、御利益は勿論、御手数も相減、旁御都合可宜哉と奉存候、且又近比伝聞仕候ニ、是迄漁場請負人之仕入雜貝類、総而御買揚相成候得共、今ニ代金御下ケ渡不相成者も有之哉ニ候、尤当年之諸仕入品も、例年之通差送候様被仰付候由、其故御改革を愁歎仕候哉ニも御座候、此等之儀は御深慮之御良策も有之、事実致相違伝聞之誤とも奉存候得共、聞及候付、乍恐奉伺候、何れ天下之人民は皆赤子之事ニ御座候間、何事も願くハ万民不差支様御所置有之度御事ニ御座候、

但差配人被召立儀ニ御座候ハ、漁場取扱向約条殿
重御取究有之、差配人より御請証文差出為置、万
一向後奸謀之仕業有之節は屹と罪科可被仰付旨御
達相成居、尚又監事之官員巡察御座候ハ、窮民
之患害ヲ醸出候儀は有之間敷奉存候、

一東京・横浜より米飛脚船、毎月三度ツ、上海迄出船相
成、右船江長崎迄兩度便船仕候付、便人并荷物之運賃
高探索仕候処、一度分之金高五六千兩余ニも相及候由、
左候へは一ヶ年外国人江相渡候金高貳拾万兩ニも可相
及、是迄七八年之間ニ外国江無益ニ相渡候金高百四五
拾万兩ニも相及候半、是は全ク

皇国之疲弊と罷成、是以実ニ長大息之至御座候、依之
前文通、飛脚船考艘ニ而も御取建相成候ハ、一ヶ年
六万兩位は 御国益と罷成賦ニ御座候、就而は以後
我 国之船を以総而運送相成候様御採奉被為在度儀ニ
御座候、是亦富家之町人共江情実篤と御申諭有之候ハ
、飛脚船取仕立方御請可仕哉と奉存候、

一北海道之産物、是迄之目的は漁獵第一と愚考仕居候得
共、其内我 国内而已之利益ニ相成ものも不少、併
鮪・鰯等之占粕は田島培養要用之品ニは御座候得共、
第一煎海鼠・干鮑・昆布等之外国江被相渡候品々、以後
尚又出産有之候様御尽力有御座度、且外国江被相渡候
品之内、白糸・種子紙・茶・北海道産物此品過分之金
高ニ相及可申、其内白糸之金高第一等ニ而、外国より
利を得るも白糸を第一と相考申候、就而は北海道は内
地より天度も致相違候付、米穀は十分之盛長如何とも
相考候へとも、養蚕は十分盛長仕候半、殊ニ天然之桑
木過分有之由、為御試養蚕御創建、白糸盛ニ出産いた
し候様御尽力御座候ハ、頗富国之道相立候儀相違有
之間敷と奉存候、前条ニも申上候通、富国之良法は外
国より利を得るを基本と愚考仕候間、尚又御熟議可被
成下候、

一開拓使之御関係ニ而は無御座候得共、富国之見込ニ付
乍序愚策申上候、当時外国江貿易之品は、前条通白

糸・種子紙・茶等之品ニ而、此三品過分之金高ニ相及可申候、依而右之品尚又盛ニ致出產候様、更ニ府藩県江御布告相成、右之本手金、自力ニ而難相調者江は拝借金被仰付、广大ニ出產相成候様御手配有之度、左候ハ、五ヶ年之後は莫大之御利益を外国より取り、富国之道相立候半と奉存候、差当り海軍御手当之儀は一日も不可闕御急務ニ而、此涯早速軍艦數十艘御備不相成候而相濟間敷、仍而甲州・信州辺は勿論、諸藩県江も良材船材ニ伐り出し、東京・横須賀并長崎江運送いたし候様御布告相成、早々御造立有御座度、左候而船材伐り出シ、運送等之入費は惣而朝廷より金札御下ケ渡ニ而取扱被仰付候ハ、諸国より無異儀伐り出し御用弁可仕候、且蒸氣機械之内、品ニ依而は速ニ此方ニ而難出来物も可有御座候間、右等之品は諸国より伐り出し候船材之内、余材も可有之候間、右を以外国人江貿易相成候ハ、御用途可相弁と相考申候、尤船材之儀は外国ニ而も要用之品ニ而多分

入用相成由ニ御座候間、如何程ニ而も貿易可相弁、尤御利益も相応ニ相及、別段現金銀御手当ニも及間敷候、併蒸氣機械を製造する之道具も早々御買入相成、如何成品ニ而も、我 国ニ而出来方相調候様、御手配第一と奉存候、我 国ノ入費は莫大ニ候とも唯金札ニ而相弁可申、外国より御買入之品は現金銀ニ而無之而は難相調、有限之金銀を以無限之品を外国より御買入相成候而は、向後有用之品、外国より更ニ御買入之節は用金無に至らぬ歎、

廟堂御深遠之御大策も有之、数十艘之軍艦、此涯外国より御買入之御手配有之候とも難計御座候へ共、广大之金高ニ相及候付、乍恐如何と愚案仕候、右事件は御關係之御職掌ニ而は無御座候得共、人々深憂する処ニ而、一日も早く海軍御全備無之而不相濟、至急之御事ニ付、杞憂之余り不顧愚策申上候、万一御採挙相成儀も御座候ハ、徹心魂ニ難有仕合奉存候、

但軍艦御製造相成候ハ、御手当金札三千万兩御出

来相成候ハ、御用弁可仕哉、壹艘五拾万兩ツ、之見込ニ御座候、左候へは六拾艘は御製造相成賦

ニ御座候、左候而右三千万兩之金札は、拾五ヶ年限を以惣而御引揚御切捨相成算当書愚策仕候間相添差上申候、万一愚策御採用相成事候へは、六十

艘之軍艦は十五ヶ年之後は御入費全く無之御成就相成賦ニ御座候、且数十艘之軍艦、横須賀・長崎

兩所迄ニ而御造立有之候而は、急將難仕候半、依之各藩江も入費金被相下、似合く之品製造方被

仰付、藩ニ依而は功者成外国人兩三人ツ、も御雇入御渡相成、素船迄ニ而も造立被仰付、出来之上

横須賀・長崎江乗廻シ候上、総御成就相成候様御手配有之候ハ、兩三年之内ニは六十艘之軍艦製

造御成就可相成目算ニ御座候、

右件々、猷芹之微志ニ而不得止申上候間、篤と御熟考之上、御抜捨被成下廉も有之、万一御採挙相成候ハ、今世之面目在余之至ニ御座候、且又暴論至極恐縮之至

ニ奉存候得共、近年来、勤

王有志之面々

天朝江身命靖猷仕候而

王制御復古之今日ニ至り、実ニ千歳之一事、至感至泣之至ニ御座候、當時在

朝之御方々は、右有志之面々、報国之赤心を深く御体認被成、誠忠憤発御尽力之御時節と乍恐奉存候、於無

左而は以後外国之奴隸と罷成、堂々たる神州も、是ニ而絶命仕候半、伏願くハ

皇国之教化を世界万国江充滿セしめん事を偏ニ奉祈願候、尚巨細は面謁可申上候、恐々敬白、

午八月廿二日

向井新兵衛

呈

(通使) 岩村開拓判官閣下

右建白後再考仕候趣、付録仕差上申候

一諸藩より毎年兵器類過分外国より買入相成由、一ヶ年

之金高相応ニ相及可申、何れ武器は当時第一要用之品ニ而一日も早く、御全備無之而不相済品ニ御座候間、外国より買入相成訳ニ御座候得共、是以外国江年々過分之現金銀相渡候間、兵器は如何成品ニ而も我 国ニ而出来相成候様早々御手配有御座度、左候へは現金銀は外国江不相渡、其上向後外国と不慮之変致到来候而も差支無御座候間、兵器を製造する之機械、至急御買入相成候様奉存候、且府藩県之商人共、毎年数十艘之風帆船・蒸気船、外国より買入候由、沓艘三万兩と見賦候而も、十艘ニ而は三拾万兩ニ相及可申候、是も現金ニ而買入候間、一ケ年三拾万兩は外国江相渡候、其内産物品ニ而貿易相成ものも可有之候得共、是亦現金銀同様之事ニ御座候間、造船場御創建、右之場所ニ而船出来之上、現金銀を以上納申請被仰付候ハ、現金銀は外国江不相渡、現金銀は其局江相集り可申、左候へは以後上品之通融金御造製之砌、旁御都合可罷成候、右両品之外ニも要用之品は何品ニ而、我 国ニ而出来

相成候様御所置有御座度、前条ニも申上候通、我 国之入費は金札ニ而相弁可申候得共、外国より買入之品は皆現金銀ニ而貿易相成候間、当時之形勢ニ而は年々金銀減少可仕候、前件万一御採用相成候ハ、毎年外国江貿易相成、諸産物品代は総而現金銀を以請取候様罷成、以後数年を不待多金相及可申、其節は当分通融之金札は惣而御引揚ニ而、享保金位之上品之通融金御製造、通融被仰付候ハ、外国より如何成術計を以奸媒相用るとも、以後は決而金銀払底之儀は有之間敷哉と奉存候、当分通、物価沸騰いたし候基は、旧幕府萩^(重秀)原近江守金銀吹替ニ相初り、其後追々之吹替ニ而贖金銀同様ニ到り、今日ニ相成候而は一ドル之相場金沓兩余ニも相当り、一ドルは古金沓分位之相場相当欵と奉存候、其故実ニ

皇国之疲弊と罷成、随而物価も尚又沸騰、窮民は尚又困窮と罷成候半と奉存候、依而右件々も御採用相成儀ニも御座候ハ、是亦富国之道相応相立候半哉と奉存

候、

一軍艦御製造料金三千万兩札御出来相成、其金札拾五ヶ年限を以惣而御引揚之算当愚考仕候、当時府藩県共高利金之取引ニ而、拾五兩壹歩又は拾兩壹歩之利足ニ而窮民共利足ニ被追、尚又困窮之哉ニ御座候間、左之通御採挙相成候ハ、御趣意一同難有可奉存候、其上軍艦御造立も容易御成就、且拾五ヶ年相立候へは御入費金全く無之、

日本國中模合金を以、御出来相成算当ニ而御兩利可罷成哉と奉存候、

一金札式千万兩

右御出来相成、東京・西京・大坂江会所被召立、其場より銘々江拜借被仰付、藩県ニ而も拜借仕度者江は、石高等之広狭ニ依り、割并を以拜借被仰付、藩県之儀は其局ニ而取扱請持ニ被仰付度、左候ハ、入費も可有之候間、本金拾万兩ニ付一ヶ年諸入費金五百兩ツ、之割を以被相渡候ハ、迷惑之儀も有御座、聞敷脱カ左候而利足

之儀は、三拾兩壹歩之輕き利金を以御取立相成候ハ、前文通窮民共ニも難有、且利金も左之通金高ニ相及申候、且府下之町人共拜借之次第は、券地等之髓成品証書ニ相添、町役人引請ニ而拜借被仰付候ハ、滞納仕者も有御座間敷、尤藩県之儀は其局々見込を以趣法相立、不首尾之者無之様取扱方被仰渡度奉存候、

一金札式千万兩 本金

右本金を三拾兩壹歩之利足之賦を以、一ヶ月分

利金高拾六万六千六百六拾六兩貳歩貳朱と永四拾文

七分

一ヶ年十二ヶ月分利金高貳百万兩ニ相及申候、

初年十二ヶ月日本利ノ高
一金式千貳百万兩

右本金ニ相掛る十二ヶ月
利金貳百貳拾万兩

二ヶ年目十二ヶ月日本利ノ高
一金式千四百貳拾万兩

右本金ニ相掛る十二ヶ月
利金貳百四拾貳万兩

三ヶ年目月末間断
一金式千六百六拾貳万兩

右書間断
利金貳百六拾六万貳千兩

四ヶ年目月末同断
一金貳千八百貳拾八万貳千兩

右書同断
利金貳百八拾貳万八千貳百兩

五ヶ年目月末同断
一金三千百拾老万貳百兩

右書同断
利金三百拾老万千貳拾兩

六ヶ年目月末同断
一金三千四百貳拾貳万千貳百貳拾兩

右書同断
利金三百四拾貳万貳千百貳拾貳兩

右之通六ヶ年目月末は元利惣ノ高本行之通相及申候付、七ヶ年目月末より利金三百四拾貳万貳千百貳拾貳

兩ツ、利金上納相成申候間、七ヶ年目月末より之利金上納之株より惣而御切捨相成候へは、十二ヶ年目月末迄都合六ヶ年分利金惣ノ高貳千貳百五拾八万六千五兩

貳朱ニ相及候、左候へは本金并利金惣ノ高左之通ニ御座候、

座候、

初年より六ヶ年目月末迄之元利惣ノ高
一本金三千四百貳拾貳万千貳百貳拾兩

七ヶ年目月末より十二ヶ年目月末迄之利足惣ノ高
一利金貳千貳百五拾八万六千五兩貳朱

右式行惣合金六千貳百貳拾貳万九千三百四拾七兩貳

朱

右之通相及候付、軍艦御製造金三千万兩、御貸付金貳千万兩、都合五千万兩差引仕候へは、金老千貳拾貳万九千三百四拾七兩貳朱、過上之算当ニ御座候得共、府藩県取扱向之諸入費も御座候間、右之料ニ見込置候、左候而残り拝借本金之儀は、十三ヶ年目月末より無利足ニ而、三分之一ツ、上納被仰付、是亦切捨相成、十四ヶ年目も同断、十五ヶ年目も同断、切捨ニ而右之通三ヶ年目皆上納相成算当ニ御座候、左候へは前文五千万兩、十五ヶ年限惣御引揚相成候付、軍艦御造立金御入費無之、惣御成就之賦ニ御座候、併御貸付残り本金御引揚之節は、融通之金札無多事罷成候間、難渋之儀到来可仕候得共、其節は外ニ現金銀御製造之上通融被仰付候ハ、差支有御座間敷、其目的も愚考粗仕置候、且天下之事は一利有之候へは一害従ふハ定理ニ而、其害を思ふ時は一として可行事は有之間敷候、併施行之次第、順序取扱之善悪ニ因て、利害得失も有之事ニ而、何れ其任ニ絶(断之)候者江委任不被仰付候而は、患害も因

て生ずる訳ニ御座候間、右等之處は篤と御評議可被成下候、万一本行之金高御出来難相成候ハ、為御試金札五百万兩御出来相成、其内三百万兩は軍艦御造立金ニ被宛、残り貳百万兩ハ東京・大坂之間何方成共、御弁利之方江会所御創建御貸付相成候ハ、利害得失断然相決可申、外ニ軍艦御買入、又は御造立之御目算有之、此涯御全備相成御事ニ御座候ハ、無此上大幸、実ニ難有仕合奉存候、万々一無其儀候ハ、御熟議之上御採挙被成下候様、偏ニ奉懇願候、以上、

一 当時御開港場居住之外国人より商人共過分之金高致借用、年々数拾万兩之利金外国人江相払候由、就中横浜之商人共は、十二八九分は外国人之金借入、右を以渡世仕候哉ニ御座候間、前条通り金札御出来、右商人共江御貸付相成、外国人之金惣而致返済候様被仰付候ハ、年々外国人江相払候利益は皆同

朝廷江相納り、富国之道も相立、人民之御救助ニも相成、御兩利ニ可相成哉と奉存候、前文五百万兩御貸付

之策、御採用ニ不相成候ハ、為御試三百万兩も御貸付被仰付、本文外国人より借入之金高ニ而も御引揚相成候ハ、御国益可相成哉と奉存候、

前条富国強兵之策ニ付、近比及愚考候假書添申上候、右二条は、当時至急之事柄ニ而、兵を強するハ人心之歸向ニは候得共、全体兵器充実より其功も猶又相見ゆる事と奉存候、依而富国之道不相立ハ、大小砲より軍艦其他兵費等ニ至り、十分難相調は人々愚察する処ニ而、只今富国之法を行んとせば外国より利を得にあり、其利を得るハ白糸ニあり、白糸を増産するハ勿論之事ニ御座候へ共、当時上下之無差別絹衣を用ひ、年々余す処之白糸少く、是外国より利を得るも少き也、仍而是が節制を不立は余糸も少く候間、以後有位之人并五拾歳以上又は病人迄、絹衣を相許し候へハ、一歳之余糸多く、一歳之利益広大なるへし、右之制を施行セハ、是迄所持之絹衣は居家之節迄着用を許し、外出は堅く相禁し候ハ、所持之衣服も無用之廢物と不相成、追

々綿布ニ可相成、如此せば上下男女之入費全く相減シ、年々過分之財を余し候訳ニ而、其余シ候財を以男女之学校を設、教諭いたし候ハ、万民人事を尽し、且肉食も平日相用ゆるの財も有之、人体を壮健ニし、困知勉強練兵等ニ至るまで、十分之力を尽し、充実せざる事有御座間敷、左候へは十年を期すして万国ニ対立する皇国ニ到るべし、其節ハ世界一等之美服をも御差許相成候期限ニも可立至哉、故を以絹服禁制も年限を窮置候ハ、人氣ニ関係仕儀も有之間敷奉存候、当時花美之衣服を女飾ニ用ひ財を費し、此が為に産を傷る人も不少、仍而右之制相立候ハ、御救助之道ニも相叶ひ可申ヤ、万一絹衣を不用時は生養之道ニ害ある次第も御座候ハ、下着迄は可相許欵、是ハ御熟考之上を奉待候、左候而此節字・仏之戦争より白糸下落之新聞紙も有之、当時之如き下落は全く外国奸商之説と愚考仕候、以後ハ外国富饒之商社江分利之趣位を以御約束相成、右江御渡付相成候ハ、後年は当時之如き下落ハ

有之間敷奉存候、又諸国絹織調之品は以後外国向き之品を織調候様被仰渡候ハ、功織之者も迷惑有御座間敷、此等之儀は御吟味之上適宜之御所置被為有御座度奉存候、以上、

冊子原寸 縦二四・七糎 横一六・七糎 一三枚

一八六 藩制改革ニ付上申書 無名氏

〔包紙ウラ書〕
「上」 無名

午八月

封 ○^墨 ー

不智無才之身分ニ而愚慮妄言仕候儀、別而奉恐入候得共、当今之形勢窃ニ相伺候処、人心不穩、物価は日ニ増貴騰、諸民差迫候儀は顯然差見得居、猶此未居家を茂致活却、無拋妻子を相捨、離散不仕候而不相濟時宜ニ茂立至可申哉、左候得は御仁政被相行候砌柄、右御趣意ニは相悖候事欵と、乍恐左ニ奉申上

候、自然御採用之一端茂御座候ハ、千万難有奉存候、忌諱ニ触候儀茂御座候ハ、愚旨之言上、幾重

ニ茂御許容被仰付度奉懇願候、

一上様ニ茂御一新之御折柄御座候付

御先代様とは何事茂御变革被為在、誠(疑カ)以憚便之御事共

奉恐入次第御座候、乍去御家之儀は日本ニ而は一二之

藩知事ニ而被為入、他藩より茂別而尊敬候故、御身体

御軽々敷不被為在御座候様兼而被為重、君臣之道は屹

と相立、敬畏仕候様有御座度、追々下は驕傲にて謙退

辞讓少茂無之、稍上を軽蔑輕骨之習風と成立候様ニ、

愚眼ニは見受申候間、何卒御威徳被為相輝候処、乍恐

奉願候、

一御一門方御初、是迄格別成家々御一新被汲受、皆屋敷

家屋等被取細、無僕等ニ而出行有之、且重職下等之職

相勤候人茂、衣服等相替儀無之、尚足輕以下ニ相成候

而も、士分ニ紛敷者有之、一切貴賤之論無御座、草野

之雖匹夫、人材を御撰萃之儀は御尤之御事御座仕候得

共、輕き者共は後年ニ相成申候而は、弥貴賤之差別無之、士風相衰候様可成立哉、右様人材御撰萃御座候而、御政事向被為行届候へは、いつれ茂学文武芸等出精、

衆並之御奉公を茂相勤、士風不被失様ニ之御旨趣欵

共奉恐察候得共、余多之士株之事ニ御座候得は、右之内ニは全体愚鈍之者も可有之事ニ而、適先祖代迄は俸

禄等之以御蔭家内致養育候者茂、右愚鈍体ニ代々罷成

候而は、学文武芸は勿論之事ニ而、何之御奉公茂調兼

逼迫仕候様成立可申、右等之者は天然ニ而不敏之至御

座候、当時態俸禄相放候而は御府内罷在候者も追々困

窮仕、学文武芸茂調兼候様成立可申哉と、乍恐奉存候

間、何卒御府内士族之儀は、是迄親敷為被召仕末之儀

御座候付、郷士族とは御会釈被召替、且上下貴賤之分

限相立候様有御座度事と奉存候、

一諸士屋敷畦反被相縮候段、専風聞仕、追々居家取細メ、

又は相広メ候者茂有之、余計之及失墜逆出仕、別而混

雜之儀ニ御座候、御一門方御初、屋敷畦反減少相成候

雜之儀ニ御座候、御一門方御初、屋敷畦反減少相成候

付而は諸士は自之事とは奉存候得共、急速風聞通被仰付候而は何れ茂込入次第御座候付、何卒畦反被相究候而茂、年限御見合を以居家取細、屋敷割被召延置被下候ハ、一統難有可奉存候、

一諸郷御拘地致所持候分は、其郷士族江致付属候様、被仰渡候哉風聞仕、且諸郷々江人家来下人等致中宿候者は、百姓成亦是野町人・浦人成被仰付候段、諸郷々江被仰渡候由ニ而、近郷之儀は日限等取究、郷士族下人成、又は右被仰渡候通、いづれニ茂願出候様、稠敷庄屋在役等より致催促頃と致当惑、今日之作業を茂忘却仕候程之儀と伝承いたし候事ニ御座候、当時鰥寡孤独廢疾之者を御憫之儀は諸民難有奉存居候処、右通被仰出、就中拘地江罷居候家来下人江は、此涯不願出候而は、真幸其外人少之場所江被召移管坏と申触候郷も御座候由、右は畢竟拘地其郷江付属可被仰付候付、涯々拘地手ニ入度所存より、銘々より拘地見締江召置候家来下人を相減シ、自身下人等ニ召拘候心術ニ而御座候半と

申者茂御座候、決而右通之御趣意ニ而は被為在御座間敷とは奉恐察候得共、若哉自然拘地江為見締召置候者迄茂諸郷百姓地、山野地等ニ致中宿候者同様被仰付候而は、進退差迫り、手短之者は自引移方調兼、山野ニ相行候義、調兼居家沽却妻子等ニ相離身壳致奉公候者余多可有之、左候得は自鰥寡孤独之為体可罷成哉、勿論拘地之儀は山野不毛之地、往古より申請被仰付、拘地高役被下置、名寄帳目録茂此以前知行高名寄帳とは奥書茂相替居候付而は、全体御吟味之訳茂可有御座候哉、尤右通不毛之土地を相開、田畠と成し、諸木を仕立候儀、過分之失墜ニ茂相及候得共、右田畠諸木之所務を以、子孫ニは取続居候者段々御座候処、諸郷士族ニ付属被仰付候而は、別而迷惑仕、決而是より差迫り候向茂可有御座哉、何れも当惑致心痛居候、諸郷士族之儀は自作高茂所持仕、山野之稼自由ニ相調候付、随分渡世出来可申候得共、御府内居住之土族等は其運ニ相調兼可申候付、後患何共奉恐入候付、右等之儀も

猶又御吟味有御座度事と、乍憚奉存候、

一 先年来御国産御仕立方ニ付、段々御手被召付候儀共、

余多見聞仕候処、御試ニ御発起御座候節、初発より諸

職人又は右ニ被掛置候御役々、諸所江外廻り等ニ太粧

ニ御取建相成、右御入価過分之事ニ而余計之御失費恐

入次第御座候、永々御取建之場所は其通被仰付候而、

御相当之事可有御座候得共、一二ヶ年茂不相立被為麿

諸人之家作用ニ下料申受被仰付と而已ニ而、当時柄甚

歎ケ敷次第御座候、以来是又前条同断御吟味有御座度

儀と奉存候、

一 御藩内之儀は、往古より米穀人体ニ不応出来高之段伝

承仕居候、左候得は当分通、旅人多人数入込候而は、

弥米穀不引足様可罷成候間、無益之者は長滞在不被仰

付様有御座度と奉存候、

一 新開等御手を被付事候得共、追々古田相忘候場所御座

候付、縦令新ニ御開発御座候共、米穀出来増申間敷候

付、第一山野諸木伐雑跡相開候而は用水茂相減、雨毎

ニは砂洗出、田畠砂入相成は相違無之、依場所は往還

も可崩及処も有之、谷山・伊集院近在川頭辺、田上川

筋辺、砂洗出候地面数多御座候付、年々右防キ被仰付、

右等之場所は開地被差留、諸木御取仕立有御座度、前

条通拘地御仕向被相替候義、去年来風聞仕候付而は、

是迄仕立置候諸木を不残伐除候筋相見得申候付、右よ

りも追々砂洗出シ、且は近年中ニは杉松等之材木・薪

等払底仕、諸人難渋可仕哉と奉存候、

右は、文盲不肖之身を以、御政事向之儀を申上候儀

は再応奉恐入候得共、先祖代より難有被召仕、妻子

介抱安堵罷在候儀御座候得は存付候儀、見聞之次第

不申上候茂、別而不本意之至奉存、不束之言上御採

用相成候儀共、実以無覚束奉存候得共、兎角諸郷之

儀、私見を去り公儀を採候様無御座候而は、追々諸

人迷惑可仕哉と、旁不顧恐上言仕候、誠恐誠惶頓首

謹言、

午八月

文書原寸 縦一七・八種 包紙原寸 縦二八・九種

横二二・二種 横四二・一種

一七七 黒田清隆ヨリ樺太産物ヲ贈ルノ書 宛名不明

口上

儲テハ樺太産物印迄進上仕申候間、御笑留被下候得は、
大幸不過之候也、

庚午

十月廿三日

黒田拝

文書原寸 縦一五・八種 横二八・五種

一八六 奈良原幸五郎ヨリ伊地知壯之丞へ

任職拜命ノ件

(封紙ウツ書)

「いちち」壯之丞様 奈良原幸五郎

貴下

フ

「

猶々、今日八ツ後より皆様御入来被下度、鹿酒差上

度候間、此段御願申上候、

御令勝奉拜喜候、然は昨日ハ早朝より上方江差越、暮前

早々帰見候処、別紙之通被仰付難有仕合奉存候、仍而大

山参事江差越墓参等いたし候而、御宅之様参上之含候処、

川上助衆江鳥渡立寄、当宅江両三輩取会ニ而隙取得参上

不仕、不埒之至御座候、今朝大山江差越、出殿之賦候間、

後も拝座旁御咄申承度、此段乍延引以書状御通達申上候、

以上、

十一月朔日

文書原寸 縦一八・四種 横五四・三種

一八九 九鬼隆都ノ尊王攘夷「鄙衷録」

(包紙ウツ書)

「笑草

尊皇攘夷 頃作

草稿

「

(表紙) 一鄙衷録 全

(付箋) 一奉初拜 賦詩詠歌

天顏 且賜天盃 藤原臣隆都〔九也〕

巴調一首 藤原朝臣隆都

甘露降來天上朝衣冠華發拜

唐堯城頭鳳舞紫雲起門下麟群流水昭

千早振神之御胤のいや榮へ

此日の本を照らす尊ふとさ

右明治三年庚午冬十月十八日 第一時參

朝、奉初拜

天顏、且賜天盃恐怖感激、窃賦一絶

鄙衷録自序

抑此神代卷也者、以寓言暫隱其本義高尚、神代之事、而使人妄不通達焉、如其咀嚼、劍玉吹棄生神、又乘白菼皮衣鶴鷄羽浮來湖水、皆是寓言而容易不可計、且此書多効老莊之意、巧文飾言、讀者宜鎮思而可知其矣、僕固陋、雖未能究其一二、然唯拳先覺之訓、以為導子弟端緒言爾、明治三庚午極月朔、精妙館主人、七十歲、

韓鋤翁、謹誌於綠紅園

鄙衷録

恭奉獻言

天朝至誠至忠寬大聖德、輔翼公卿殿下、夫我日本國也者、古昔

國常尊始彰出、而國狹隄尊・豐斟淳尊・共興溼煮尊・沙土煮尊・大戸之道尊・大苦辺尊・面足尊・惶根尊、各並立、衣食住漸具、至於伊奘諾尊・伊奘冊尊、終開豐葦原中國、以伝子孫、其初奉瓊矛之玉、以化豎天柱、以存心性之誠、持白銅鏡、以生星辰於左右、以施内外之政、廻首顧盼前後、日月以定遠近之謀、夫日天之德仁也、月天之德智也、星辰之德勇也、勇有剛柔、日月・星辰・日靈・月誦・蛭兒・素戔鳴德、立功示法則於万世、至于今

天皇尚垂拱而天下治、宰相及百官百掌各守職、士農工商均樂業、草木鳥獸皆足用、山川海陸悉備用、城

郭宮室整、飲食衣服充、五常五倫行焉、

鏡とそしれ

冊子原寸

縦二七・八極

包紙原寸

縦二七・七極

○示四矛有三徳凶

化堅 以 靈

●日矛 ○瓊 心之誠 神之徳仁也
天柱 存 東

生星辰 以 読

●月矛 ○鏡 内之政 神之徳智也
於左右 施 西

前後 以 南

●星辰矛 ○劍 遠之謀 星之徳勇也
日月 定 素 柔 北

○讀日

温瓊仁徳堅心柱 明鏡智謀治帝土、

利劍勇裁徹陸浜 星辰日月恩光普、

日の矛は瓊よ

星辰矛劍

月矛をは

横二〇・二極 五枚

鹿児島県史料編さん関係者

顧問 国立国会図書館 大久保利謙

東京大学 客員調査員 宮地正人

史料編纂所 所長 芳即正

尚古集成館 館長 五味克夫

委員 鹿兒島女子大学教授 四本健光 田島秀隆

桑波田興晋 哲哉

安藤保原口 敏昭

日隈正守 柳原敏昭

館長 井之口恒雄

副館長 山野達雄

調査史料課 荒木公紘 尾口義男 徳永和喜

荒田邦子 有田緑

伊集院祐子 上野みどり

尾形ひろ子 長嶺泉子

鹿 児 島 県 史 料

玉里島津家史料 五

平成 8 年 1 月 10 日 印 刷

非 売 品

平成 8 年 1 月 31 日 発 行

編 集 鹿 児 島 県 歴 史 資 料 セ ン タ ー 黎 明 館

発 行 鹿 児 島 県

印刷所 第一法規出版株式会社

〒107 東京都港区南青山 2-11-17
